写真新世紀

New Cosmos of Photography

2014 Vol.28

GRAND PRIZE 2013

Ikuro Suzuki

EXCELLENCE AWARD

Sumire Ando
Shoko Ebihara
Shin Mizuno
Yuya Yabuguchi

FINE WORKS

Takaaki Asai
Naohiro Utagawa
Shinichiro Uchikura
Takayoshi Uchida
Takaaki Uba
Rika Enami
Miki Kitazawa
Toshihiro Kobayashi
Miki Sawada
Yohei Suzukawa
Kouichi Chiba
Yuki Naito
Naoki Nishimura
Hiroki Fujii
Kai Maetani
Keisuke Yasuda
Yusaku Yamazaki
YOKNA PATOFA
Seiko Watanabe

PORTFOLIO GRAND PRIZE 2012

Yosuke Harada

INTERVIEW PAST WINNING WORKS

Sohei Nishino

SPECIAL DOCUMENT

Noi Sawaragi

写真で何ができるだろう？
写真でしかできないことは何だろう？

「写真新世紀」は、写真表現の可能性に挑戦する新人写真家の発掘・育成・支援を目的としたキヤノンの文化支援プロジェクトとして1991年にスタートしました。作品のサイズや形式、年齢、国籍などを問わない公募形式のコンテストを実施し、写真の持っている新たな可能性を引き出す創作活動を奨励しています。

写真の誕生から170余年。デジタルカメラの普及などにより、今や誰もが気軽に写真を撮り、楽しむ時代となりました。絵画やイラストといった隣接ジャンルとも互いに影響を与え合い、写真表現の幅はより一層の広がりを見せています。写真を取り巻く環境が大きく変化していくなか、「写真で何ができるだろう？写真でしかできないことは何だろう？」を常に問い、写真界に新風を吹き込むクリエイターを応援してまいります。

「写真新世紀」は次世代の表現を切り拓く才能を発掘し、新人写真家が大いなる第一歩を踏み出すための「場」でありたい。私達はそう願っています。

CONTENTS

2 2013年度（第36回公募）グランプリ
鈴木育郎

2013年度（第36回公募）優秀賞
8 安藤すみれ
14 海老原祥子
20 水野 真
26 藪口雄也

32 2013年度（第36回公募）佳作
浅井孝秋／宇田川直寛／内倉真一郎／内田尚昌／姥 貴章／えなみりか
北沢美樹／小林敏大／澤田実希／鈴川洋平／千葉広一／内藤由樹／西村尚己
藤井宏樹／前谷 開／保田敬介／山崎雄策／YOKNA PATOFA／渡邊聖子

42 優秀賞選出審査会 総評

44 2012年度（第35回公募）グランプリ受賞者
原田要介「見るになる」

50 2013年度グランプリ選出公開審査会報告

53 写真新世紀の歩み

54 2005年度（第28回公募）優秀賞
西野壮平「ジオラママップ」

62 SPECIAL DOCUMENT
椹木野衣「新＝真世紀をめぐって」

64 インフォメーション 第37回公募のお知らせ・巡回展情報

写真新世紀

2013年度（第36回公募）グランプリ受賞

鈴木育郎　Ikuro Suzuki

「鳶・CONSTREQUIEM」

2013年度（第36回公募）グランプリ受賞

鈴木育郎　Ikuro Suzuki

「鳶・CONSTREQUIEM」

ブック／カラープリント／174ページ／137点

地元、浜松で24歳までいろんなバイトをしながら絵、バンド、写真と表現する事をメインに生活をしていた私の一大転機は、なにげなく立ち寄った図書館で鬼海弘雄さんの写真集「PERSONA」を手に取り衝撃を受け、その表紙を飾っていた舞踏家・吉本大輔さんのポーランドツアーに同行した事でした。

帰国後そのまま母親と弟の住む1Kのアパートに転がり込んで朝から晩まで居酒屋とカフェで働き、街ですれ違う人に声をかけ写真を撮っていました。そんな生活が半年になろうとしていた時に３月11日の地震によって収入が激減し、写真を続けていくためにももう２度とやらないと決めていた鳶をやろうと決心しました。そして段ボール２箱分の荷物と共に新宿にある寮へと引越ししました。 3DKに５人で住み、私はつい最近バックレたという人が使っていたベッドを使う事になりました。仕切りの無い部屋は落ち着かず、私は仕事から帰るとすぐシャワーを浴び逃げ込むようにゴールデン街へと向かう日々を送っていました。それがきっかけで２冊目となる自主制作の写真集を完成させ、本に重点を置く写真の撮り方とまとめ方が沁み付きました。

ちょうどその頃、日勤に加えて夜勤が始まり一番つらい時期が訪れました。そんな苦痛を和らげたくて、作業中に写真を撮りたいと当時の親方に言ったら、親方は秋田なまりで快くOKしてくれました。それまでは休憩中や終わった後に写真を撮っていましたが、作業中に撮れるというのは大きな一歩でした。

それから私はインスタントカメラやコンパクトカメラを胸ポケットに入れて仕事をするようになりました。常に持ち歩く事により光の変化により敏感になりました。身体を動かす分、食事も美味しく、男だらけの職場な分、女性を見る目は輝き、夏には休みをとって行ったことのない土地や友人を訪ねて旅をする。本来の人間らしい生き方を模索しながらも、ゴミを垂れ流しコンクリートを積み上げてゆく。写真というとてつもない道具を使って表現する事や都会で生活している事自体が矛盾していて、たとえ田舎で自給自足しても矛盾はついて回る。矛盾を抱えながらも怒りに振り回されず、自分の感覚を研ぎ澄ませて、守るべきものを守り、悔いのないように生きる。写真はさらにそれを後押ししその過程を記録する、そして私の人生が前に行く。その日常はたくましくも危うい出会いと別れの繰り返し。いつかの風は今は私が起こす風、キミの瞳に映る私の姿、時は決して止まることはなく、すべての写真は幻、出会うその時まで。

過去を現在へと蘇らせ未来へと進む力をくれる写真。勇気と愛おしさをありがとう。

まぁとにかく本日も安全作業で頑張ろう!!!!

鈴木育郎

1985年　静岡県浜松市生まれ
　　21歳より写真を撮り始める
2010年　舞踏家 吉本大輔氏のポーランドツアーに同行
　　帰国後より東京に移る
2012年　個展「月夜」新宿ゴールデン街マチュカバー
2013年　個展「月の砂丘」蒼穹舎

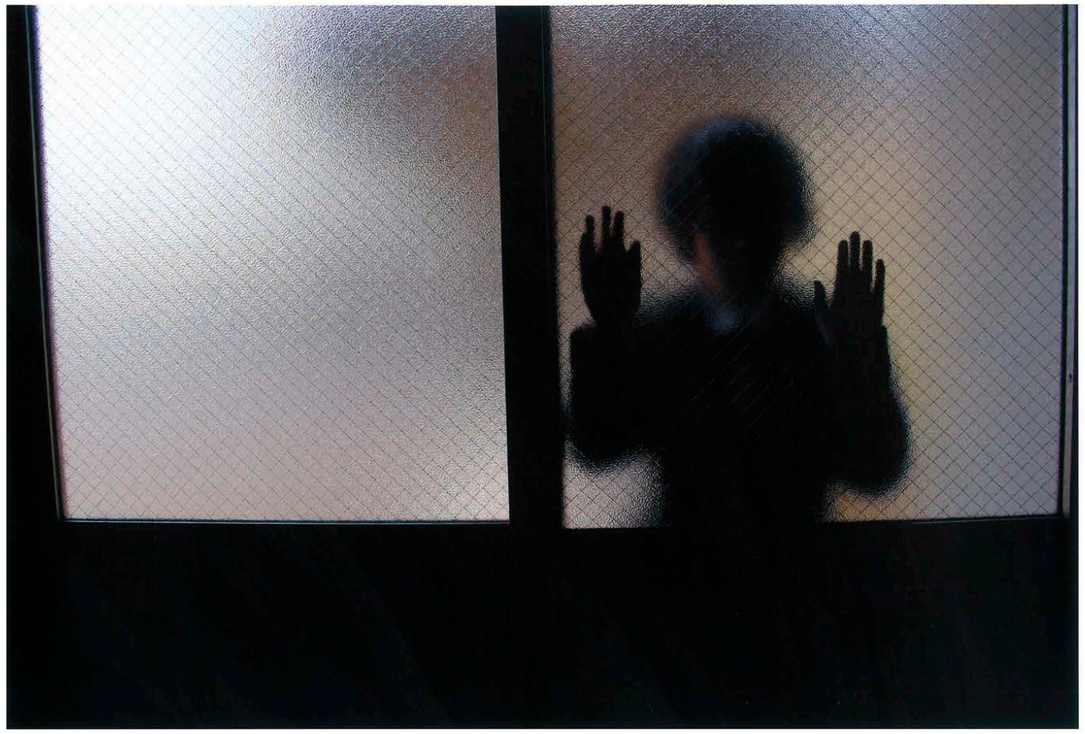
選者コメント

大森克己

作品が鳶職である作者の実人生の反射率の高い鏡のようでキラキラと輝いている。人間が生きている体温が感じられるのがとてもいい。
まっすぐなまなざしで現実と向き合う姿勢に将来性を感じるデヴュー作に相応しい作品。展示にも期待したい。

安藤すみれ Sumire Ando

「Escape」



安藤すみれ Sumire Ando

「Escape」

ブック／A4／インクジェットプリント／29点

私は、自分自身がよく分かっていません。何をしたいのか、何を求めているのかもよく分かりません。

実際の所、今の私は本当の私ではなく、偽りの私だと感じています。「これをやりたい、主張したい」と思っている心がありながら、体は失敗や怒られる事に対する恐怖にすくんでしまい、行動する事がどうしても出来ないのです。いつからか忘れてしまいましたが、なるべく自分で起こした過失を他人に怒られたくない為に思っている心は隠し、自分自身を偽って逃避生活を行うようになりました。学校生活はうわっつらだけ良いようにし、トモダチには当たり障りの無いように接していました。衝突の少なく、平和な毎日を送ることが出来ていました。

その反面、そんな逃避行動を続ける自分に嫌気がさすようになりました。「まだ学生だから」と言う安心感に浸りその中で生活をしていながらも、制服や証明書などという学校の象徴が私を縛り付けているようでなりませんでした。私は、臆病なまま金魚の糞のように人の後についていく一生になっても良いのだろうかと思うようになりました。頭の中でぐるぐると回る不安、悩み、焦り。沢山の、襲ってくる感情。新しい自分になりたいと思いました。変わってみようとステップを踏もうともしました。しかし、どうやっていいのか分かりませんでした。その為に、最初はぼんやりとした考えから思いついたものでしたが、「客観的に自分を見つめてみたい」と思ったのがこの作品を作るきっかけです。

自己表現をする術は沢山あります。言葉、運動、絵、文など。しかし私はそれらで自己表現する事が苦手です。恐らく、心と体が別々にある為に一心同体で表現する作業を行うことが難しいからなのだと思います。その中で写真を選びました。写真を選んだ理由は、はっきりとは分かりません。ただ、何かいけそうな気がしたから。自分以外のモデルでやろうとは考えていませんでした。カメラを三脚に設置し遠くからリモコンで操作する。カメラと私。カメラは私に文句を言いません。私が望めば簡単に私を写してくれる。カメラと私の間に隔たりはありませんでした。シャッターが切れる度に、体の中からふわふわと湧き上がってくる何か。息が止まりました。なぜかドキドキしました。レンズの真ん中をずーっと見ているうちに、まるで、自分が自分を見ているような、妙な気分にもなりました。

そして、出来上がった写真を見る。そこに写っていた私は、考えていたよりとても卑屈で、不細工な表情をしていました。

私は、自分が大好きな人間です。しかし、自分大好き人間だからこそ周りで行われている事に怖いと感じて行動する事ができない臆病者でもあります。

私を取り巻く環境、得体の知れない不安、固定観念、既存のものにすがるばかりの自分、利己的な自分、ぼんやりとした人間関係……。

私は、そんな私自身からもEscapeすることを望んでいるのかもしれません。

新しく変わる事にまだ恐怖を感じる事が多いけれど、そんな事は思いっきり蹴飛ばして色々な事を自分の目で、肌で、耳で、直接見たり感じたりたりするようになりたい。自分は、本当は一体何者で何をして、何を見て、どう動かなければならないのか。

私にとって、写真は私自身を変えてくれるものです。やっと、変えられるものを見つける事が出来た。だからこれからも写真を続けていきたい。そして、自分だけを見るような狭い視野だけではなく、広い視野も持ち、周りを見て自分が写真でできる事を考えるような人間になっていきたいです。

安藤すみれ

1995年　宮城県生まれ
2011年　宮城県柴田農林高等学校入学。写真部に入部
　　写真甲子園2011出場
2012年　写真甲子園2012出場
2013年　全国高等学校総合文化祭長崎大会写真部門出展
　　宮城県柴田農林高等学校写真部部長
2014年　日本大学芸術学部写真学科入学

選者コメント

椹木野衣

高校生の「私」が、大人の尺度で作られた「学校」のなかで不意に直面するギャップを、身体の不釣り合いや置き場のない心理を通じて、実に鋭利にとらえている。同時に、そこから一歩出ても、水のように不定形な「未知」のなかであがくしかない現状が、自己を突き放すための道具として写真を使い、（一見しては情動的でも）きわめて冷徹にとらえられている。

記念写真 東京タワー御来塔記念 2008年7月27日

01100

海老原祥子 Shoko Ebihara

「記念写真」“souvenir photographs”

記念写真

記念写真

ちちぶ芝桜の丘
平成20年 7月12日

花と動物たちの
エンターテイメント・ファーム
マザー牧場 2008. 7. 16

スタジオパーク
2008年 7月27日
STUDIO PARK
記念写真

7月27日 記念写真 シンフォニー

AQUA MUSEUM
横浜・八景島シーパラダイス 来島記念
2008年7月12日

越後一の宮 弥彦神社参拝記念

日本を代表する山岳ルート 標高 1.828M 黒部平

黒部ダム

中部山岳国立公園 黒部峡谷鉄道 ～トロッコ電車の旅～

伊豆海洋公園
城ヶ崎海岸
2008 7月11日

記念写真
2008年7月12日

名古屋城
日本三名城金鯱
名古屋城観覧記念

伊勢神宮参拝記念写真 ㈱ミナミカラー外宮前スタジオ

7月23日 4

TEMPOZAN HARBOR VILLAGE

⚓ エキゾチックタウンKOBE　神戸港観光記念 ⚓

記　念　写　真

海老原祥子　Shoko Ebihara

「記念写真」“souvenir photographs”

ブック／プリント／八ツ切（152×210mm）～六ツ切（203×254mm）／インクジェットプリント／タイプCプリント／39点

どのガイドマップにも載っていない。地元の人間しか行かない場所にも“それ”はあった。

一般的には観光地とは言うもののぱっと見どこが見どころかわからない。私はまず、“そこ”の横を通り過ぎ、近くにある粗末な小屋で昼寝をしている男に声をかけた。男は気だるげに背伸びをしながら今まで寝ていた椅子に腰掛けると、私をじろりと見て手を首に回し「なんだ」と言った。そこで私は今まで何十回としたお願いをおそるおそるする。男は胡散臭そうな顔で私を一瞥したあと、うーんと一度唸り「そこに、」と先ほどの“そこ”を指差し、どこからかデジタルカメラを取り出すと、引きずるような足取りで私を先導した。男は裏返した日付ボードを乱暴に直すと「勝手に使うな」と書かれた手書きの紙をくしゃっと丸めてポケットに突っ込む。そして三脚にカメラを固定しながら「じゃあ、そこ二段目」と顎をしゃくると、私が“そこ”に立ったのを確認する前にファインダー越しで位置の微調整を始めた。私はいつもの服装でいつものように1人で笑った。

かつて日本の至る所に記念写真屋はあった。しかし現在ではデジタルカメラが普及したことによるのか、どんどん記念写真屋は減りつつあり、寂れた景勝地に未だ残っている所もあれば、誰でも知っている観光地に存在しないこともある。

私は旅をする前に全国観光写真事業協同組合というサイトで景勝地にある写真屋を確認し、電話で記念写真を撮っているかを聞いたあと、その場所に向かう。もちろん景勝地に写真屋があるからといって目当ての団体向けの記念写真を行っているとは限らない。その場合は役所や観光協会に有無を確認する。しらみつぶしに観光地近くの写真屋に電話をすることもある。そうして次の行き先が決まる。

もちろん事前に調べたからといって必ずしも撮ってもらえるわけではなく、断られること、足元を見られることも多い。しかし、最初こそ驚かれるが交渉さえ成立すれば淡々と撮っていく。美しい風景も珍しい建造物も背景として消費していく。彼らにとってはただの日常でしかないからだ。そして私も彼らのフィルターにかけられ奇異な闖入者から客として生活の一部として一枚の写真に収まる。いつも同じ服、同じ笑顔で。

記念写真はこの世にたった1枚しかなく、ネガも存在しない。撮影はもちろんポーズも立ち位置もカメラマンに任せる。それぞれに使うカメラは異なり、プリントする機材も異なり、紙もプリントの大きささえ一定ではない。撮影後の写真を確認するかと聞いてくる人もいれば、無言で数枚撮る人もいる。たった1枚写真を撮ってプリントが出てくる場所もあった。

足掛け5年に及ぶ旅の記録は28県47枚におよび、すでに日本地図の半分以上を埋めた。最近では新しく地図を塗りつぶすことも目的のひとつになったかもしれない。写真を見ると旅のことを思い出す。各地の名産や美味しい食べ物、出会った人や美しい風景、そして珍しい建造物。それはただの記念写真の背景ではなく、風や匂いすらも呼び覚ますほどの確かに私がそこに行った記録でもある。

いつか日本すべての都道府県の色が塗りつぶされたとき、私は何を見るのだろうか。

海老原祥子

東京都生まれ
武蔵野美術大学造形学部デザイン情報学科卒業
現在、広告制作会社勤務

選者コメント

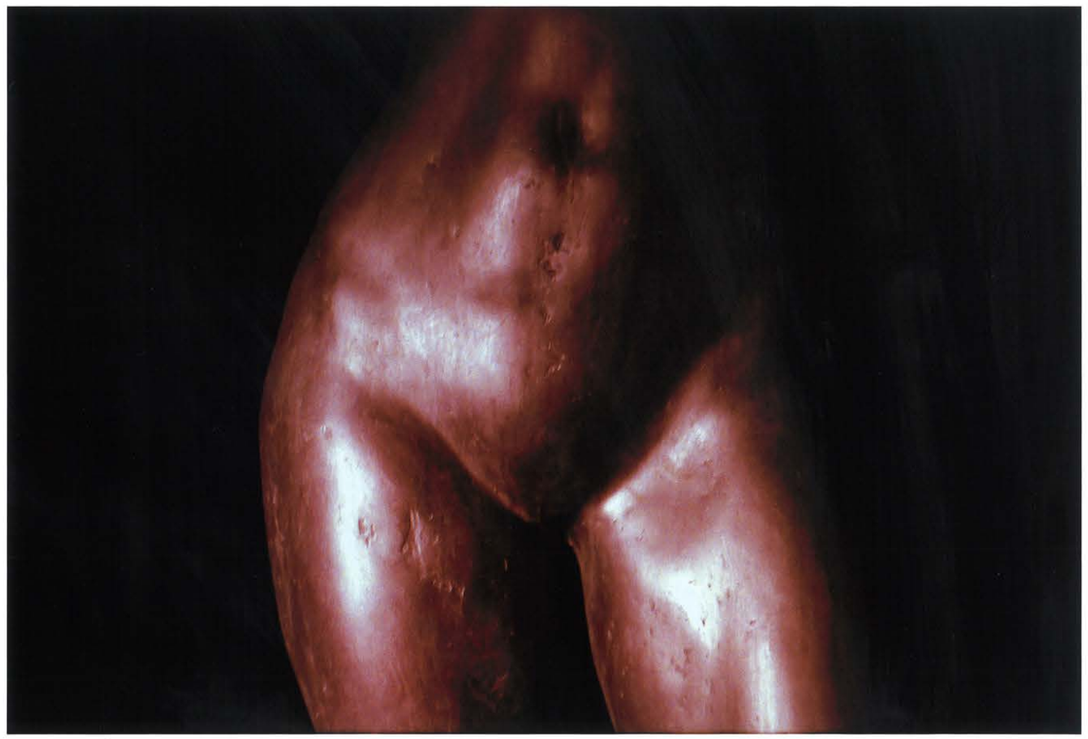
清水 穣

昔ながらの観光地の記念写真場で、写真師に自分一人を撮ってもらい、それを自分一人で購入する。時の流れの中で何かを留め、遺すために写真を撮り撮られ、その写真を見て過去の何かを思い出すという写真の本質的機能を、「おひとりさま」で反復する空しさや可笑しさの中に、もはや「記念」でも「想起」でもない、現在の写真のありようが反映している。

水野 真 Shin Mizuno

「よそからきた」

“Modern Strangers of the Countryside”



水野 真　Shin Mizuno

「よそからきた」
“Modern Strangers of the Countryside”

ブック／六ツ切／インクジェットプリント／42点

有刺鉄線の向こう側、積もった雪の中に鉄の梯子が頭だけ出して沈んでいました。
何枚か撮影し次の日も気になってまた行くと、鉄の梯子は完全に雪に埋もれてどこにあるのかわからなくなっていました。鉄の梯子を探す僕の横をざくざくと音を立てて昨日も先週も見かけた人が通り、「この辺に撮るものなんてなんにもないべ」と田舎風の洒落を投げかけてきます。

季節だけが忘れた頃に頭を出すぐらいで昨日も先週も同じ時間同じ場所、アナーキーの洒落はとても鋭い。そういうのがとても魅力的なんです。写真は家の近所が良いんです。家の半径数キロぐらいを自転車や徒歩で撮りに行くのが良いんです。何度も何度も同じ場所へ行って、そうすると考えなんてどこかへいってしまうし、住宅地から少し離れるとただ広い自然が現れて光も闇もわかりやすい。

いつシャッターを押しても同じに見えるところも、待っているとあっという間に日が暮れて見えなくなる。夏は暑くて冬は寒くて、草陰には毒を持った先客がいて冬の冷たさは帰り道を重くする。間の季節は油断していると後から自分自分私私とうるさくなる。懐かしい風景に辿り着く前に一種の寂しい風景がシニカルな表情で諦めを強要して来ます。物事に驚きと興味をなくして忘却について夢想することはここに居て簡単なことです。だからさっさとシャッターを切ってどうしたって撮ってやろうとどんどん歩いて行く。そのうちに遠くへ来てしまうこともあります。

ある日写真を撮っていると「よそからきたのかい?」と近所のお年寄りに声をかけられました。その人とはずっと前から顔見知りのはずでしたが、その時は僕が誰だかわからない様子でした。「違うよ、その辺に住んでいるよ」と答えました。お年寄りは「ああ、そうか。暗くなるから早く帰りな」と言って去って行きました。

「よそからきたのかい?」という言葉は震災と事故の影響で人と土地が混ざり合った為に出て来た変化の一つです。あれから沢山の人が去って行き、そしてやって来ました。住んでいる僕もその変化とは無縁ではありませんでしたが、慣れ親しんだ近所でよそからきた人に間違えられるとは思ってもいませんでした。最初は偶然だと思っていたけれど、その後も別の場所で別の人に誰かに間違えられることが数回あり、だんだんとよそからきた様な気分で近所への微妙な距離を感じ始めました。その距離は遠くもなく近くもなく疎外感と似ている様で違って、時折見せる可能性が混沌とした未来とその静けさを受容している様でした。そうして見える近所はあらゆる世界に似ていました。物語が終わった後の語られることがない事柄と、違いを分けるものについて、顔や形や境遇について。どこへ向かうのかどこからやってきたか、理由も目的もわからない人について。

それらがカメラを通して関わったからわかったことだと気付いたとき、自然とアルバムの制作をしていました。時間が経ち、今日カメラを通して見えてくるものは最初の騒々しさに比べるとずっと静かでさりげないしるしの様なものです。さりげないしるしはふとした距離から放たれた視線で命題へと変わりました。今まで当たり前だった風景は日々変わって行き、そのスピードは見えるものも見えないものも以前より早い。それでも、いちいち感傷的になることもなく、変わって行く近所を特別に残しておきたいと思うようなこともありません。

撮れるものも興味も前とあまり変わっていないから、また同じ場所へどんどん歩いて行きます。

家に帰ると草野心平が本棚のどこかで「昼間の風はどこ行った」とうたっていました。まとめていた名前のないアルバムの表紙に「よそからきた」と書きました。
そういうのがとても魅力的なんです。

水野 真

1983年生まれ　福島県出身
2010年　友人に写真を教えてもらいながら故郷を中心に写真を撮り始める

選者コメント

佐内正史

良く見ているなぁと思った写真。ピントが合っていることやよく見えていることから少しずつ変化があった。最初は写真がちょっと気になっていた。他の作品を見ている内にどんどん魅かれて印象が変わってきた。タイトル、本人のコメントにあるように「よそからきた」という言葉と写真がマッチしている。

藪口雄也 Yuya Yabuguchi

「コンテナの中の瞳」“Pupils in a container”

藪口雄也　Yuya Yabuguchi

「コンテナの中の瞳」“Pupils in a container”

プリント／640×465mm／インクジェット／32点

動画ではない写真は、平たく言えば一枚の紙切れだ。しかし、そこには見るものと写り込んでいるもの。そして、撮るものとの言語を超えた言葉が凝縮されている。それぞれの背負った過去や未来、様々な境遇がそこに数えきれないほどの魂を送り込み、たくさんの言葉に溢れ、一つの物語が出来る。そんな写真を撮り続けていきたいと、様々なものにレンズを向けてきた。美しいもの、哀れなもの、グロテスクなもの、異次元の不思議さを持ったもの。存在する全てのものに言葉は溢れている。

犬の瞳を中心に写真を撮り始めて4年になる。大通りを放浪していた一匹の犬。あばら骨の形が浮き上がるほど痩せ細り、毛の薄汚れたその犬は、近寄った私に威嚇するでもなく、甘えるでもなく、自然に身を任せたようだった。夜道を自然に歩いたその犬も、警察に保護してもらう時には抵抗をした。果たして保護したことはよかったのか。もし保健所送りになると、おそらく死しか待っていない。そんな重い気持ちを引きずり帰宅した私を見つめてくれたのも、我が家の愛犬たちだった。

そんな日から一年。私の愛犬が亡くなったという連絡が入った。妹のようにそばにいた愛犬の瞳。警察に保護されるときの放浪犬の瞳。私の頭の中でそれらが次々に浮かんできた。帰省した私を待っていたのは、愛犬の写真と小さな骨壷。そしていつも着けていた首輪だった。

その数日後、私は地元の保護施設を尋ねていた。

犬たちは何を語るのだろう。
私は犬たちに何を語るのだろう。

施設のドアを開けた時、たくさんの瞳が私を捕んだ。
悲しみ、怯え、戸惑い……
遠くから、物陰から、真下から。
呼吸をする私のリズムが乱れた。

そんな出会いから4年が過ぎた。

虐待、飼育放棄、飼い主の事情……彼らの過去は様々だ。彼らは一つの箱の中で呼吸し、命を繋ぎ、希望を待つ。彼らの瞳が放つ色は決して悲壮なだけではない。恐怖だけでもない。彼らは明日を生きるために、今日を生きている。

虐待の悲惨さは言葉にすることは出来ない。放棄された心の闇も推し量ることは難しい。だから私はあえて正面から彼らの瞳と向き合った。彼らの言葉は、ボロボロになった身体が語るのではなく、彼らの瞳が語る。その思いから彼らの瞳にこだわり撮影を続けている。

東京と大阪の個展に足を運んで下さった方々が彼らとどのような会話ができたのか私は知ることはできない。しかし、彼らが語る。私が彼らと語る。そして一枚の写真の内と外から見つめ合うとき、命と命の繋がりが、そこに一つの世界をつくると私は信じてる。そしてこれからも存在するたくさんの瞳と向き合っていきたい。そこに生まれる言葉を、命を撮影して行きたいと思う。

藪口雄也

1989年　兵庫県生まれ
2010年　グループ展 gakkenflex展／ナダールOSAKA
　　グループ展 若／海岸通ギャラリーCaso
2011年　eye 東京個展／ギャラリー新宿ブリコラージュ
　　eye 大阪個展／芝田町画廊
2012年　大阪芸術大学卒業制作 優秀賞
　　大阪芸術大学芸術学部写真学科卒業
　　大阪芸術大学大学院芸術研究科前期課程入学 在学中
　　Developing vol.3 学生展／海岸通ギャラリーCaso
2013年　Developing vol.4 学生展／海岸通ギャラリーCaso

選者コメント

ヒロミックス

とにかく写真が上手い。良い写真です。犬とちゃんと会話が出来ていて、気持ちを理解している。見ていると話しかけられているようで、それぞれの性格が伝わってくる。撮っている作者は理解力があり優しい方なんだろうと思います。写真家は他者への理解力が高い人じゃないと出来ない職業です。動物救護も社会問題の1つであり問題意識をちゃんと持って作品化しています。「ペットは人を癒すために宇宙から贈られてきた」という謂れもあって、古来から続く人間と動物との共存は大きな課題だと思い、この作品を選びました。

浅井孝秋 Takaaki Asai
「shortscape」

ブック／B4／インクジェットプリント／38点

制作意図

作者の生活圏である東京23区の住宅街の光景を「shortscape」と名付け撮影。東京の過密な空間がもたらす心理的な影響を視覚化していこうと試みながら作品の制作に取り組んだ。

選者コメント ヒロミックス

日陰を濃い黒にデジタル加工したのかわかりませんが、晴れた住宅街と日陰の濃い黒のコントラストが不思議な写真です。異次元感があります。暑い夏が蘇ってくるし、昭和っぽさを感じるし、東京とわかるのもよいですね。好きなテイストです。

宇田川直寛 Naohiro Utagawa
「回」
“KAI”

ブック／大四ツ／タイプCプリント／41点

制作意図

繰り返す事、変換して行く事、ある状況の中で転回して行く事。そして一体どのようなモノができあがるのかを楽しみに制作しています。

選者コメント 佐内正史

色が独特で、映像的な印象がある。ノリがあってスポーツみたい。この即興的な感じでまた見てみたい。

内倉真一郎 Shinichiro Uchikura
「佳子」
“KAKO”

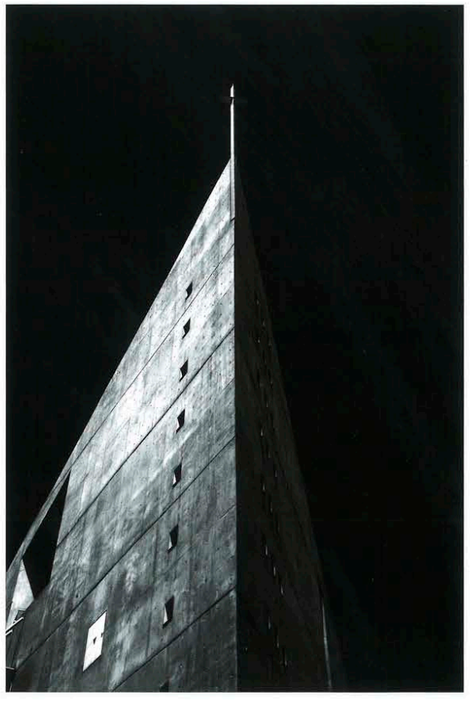
ブック／A3／クリスタルプリント／34点

制作意図

佳子は、無機質であるような……
佳子は、時に子どもっぽさもあるような……
僕には佳子がわからない。

選者コメント 椹木野衣

すぐに大正期の岸田劉生の絵画「麗子像」を連想した。けれども「佳子」はいま現在を生きる存在で、様々な場面に唐突に姿をあらわす。そのギャップが色彩や化粧を使って巧妙に演出され、写真という「事実／記録」が虚構に反転するギリギリのところで、うまく「作品」に落とし込んでいる。



内田尚昌 Takayoshi Uchida
「standing」

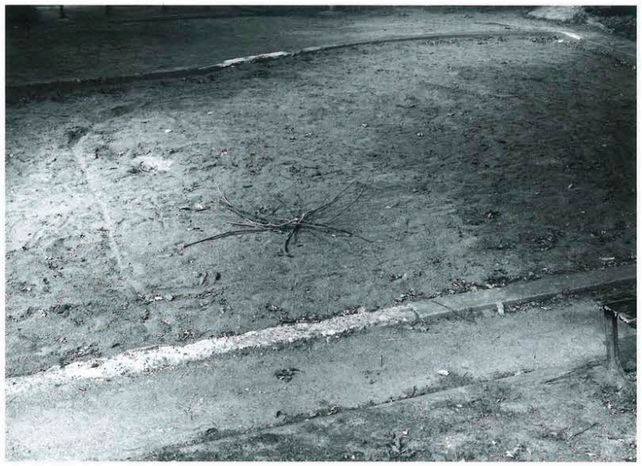
ブック／A4／インクジェットプリント／26点

制作意図

コンクリートやガラス張りの建築物。
賑わう建物、無人の建物。
どちらもただ其処に建っているだけ。
では、無い。
無機質に感じていた物に温度を感じ、
ポートレートを撮ろうと思いました。
出来るだけ、かっこ良く。

選者コメント ヒロミックス

おそらく有名な建築がたくさん写っていて、作者が感動しながら撮影しているのが伝わってきます。1950～60年代の写真のようでもあります。様々な角度で撮影する可能性がある中でもベストアングルを選び出していると思います。



姥 貴章 Takaaki Uba
「PARALLEL」

ブック／四ツ切／インクジェットプリント／29点

制作意図

存在することの類似性、同時性をテーマに、撮影地を固定せず、断片的な撮影を行いました。
関係のない場所で似たものが同時に、まるで“平行線”のように存在している。このようなことを表現したいと思いました。

選者コメント 清水 穣

抑えた白黒、バリエーションをうまく作って明確で知的な仕事をしている。とはいえ、こういう作品は実は70年代にも見られたものであり、今の20代、30代の人がよく撮る傾向で、カラーだとありがちだが、白黒ネオコンポラのよくできた例として選んだ。

えなみりか Rika Enami
「million blondes and me」

ブック／B4／トレーシングペーパーにレーザープリント／100点

制作意図

この作品は自分の髪をブロンドにするという選択をした彼女とあたしの選択の「記念写真」であり、この写真は「記念碑」の様なものであり、選択そのものであり、その選択にまつわるありとあらゆることの写真です。

選者コメント 椹木野衣

時と場所をいくら変えても変えようのない「自分」が、金髪に変えた髪と変わらない私との消しようのない溝を通じて、なんどでも執拗に繰り返される。その行為と淡々としたイメージの持続が、それ自体、表現というよりも機械としてある写真ならではの効果をあげている。

北沢美樹 Miki Kitazawa
「CONTACT」

ブック／A3／インクジェットプリント／33点

制作意図

高速バスでの移動中、車内の揺れに身を任せていたら、突如として意識していなかった昔の記憶が蘇ってきた。振動は現実世界での私たちの意識や記憶の境目に裂け目を入れる。いつか忘れてしまうこと、忘れていくことへコンタクトしたいと思い制作した。

選者コメント ヒロミックス

とにかく可愛いガーリーフォトの世界です。ちょっとファッション寄りですが被写体の選び方も良い。人物写真がとても良いですが時々別の世界のショットが混ざっているのが残念でした。ドリーミングな感じと共に、現実への切なさも感じられます。少し寂しげで、今の若い世代の生き辛さを反映しているようにも思いました。

小林敏大 Toshihiro Kobayashi
「自然保護区の住人」

“Residents of the nature reserve ～Imagination is free～”

額装／大全紙／1点、ブック／大四ツ切／インクジェット ピグメントプリント／26点

制作意図

ある日の朝、とても穏やかな気持ちで1日がはじまった。
とても幸せな目覚めで、水と同化しようと水中にいる時に感じるものと似ていた。

真っ白な空間にヒトがいた。
そのヒトに近づこうとすると消えてしまいそうになり、
そのヒトの存在を残すためにはある程度の距離が必要だった。
人の内側には大切にすべき領域がある。

便利で簡易的でスピーディーな世の中で
思考や想像する時間を大切にしていきたい。

選者コメント 大森克己

プリントが丁寧で美しい。ハイキーなトーンはモノを見えなくする危うさもあるが、逆に一所懸命に見て、やっとギリギリここまで見える、と積極的に解釈した。

澤田実希　Miki Sawada
「窓ロマン」
“Window Romanticism”

ブック／A4／インクジェットプリント／110点

制作意図

外を歩いていて、つい見てしまう他人の家の窓。そこから見える生活感。一見だらしのないものの中にある奥深さや美しさがたまらなく好きです。人々の生活が無意識に作り出す風景にロマンを感じていただけると幸いです。

選者コメント　椹木野衣

日本人の住意識が意表を突くかたちでとらえられている。欧米では、外に向いた窓は公共のものという「意識」が強い。ここでの写真はまったく反対に、内部に住むひとさえよければ、外からどう見えても構わないという「無意識」として攻撃的に表されている。

鈴川洋平　Yohei Suzukawa
「ありもしない羽で空を飛ぶ」
“I fly in the sky with the nonexistent wing”

ブック／A4／インクジェットプリント／40点

制作意図

何も無い、何者でもない僕ら。
肥大化した自意識は夜をさまよい、
ここにある体は空洞化が進む。
それでも僕らは光を求め、この現実と虚構の真ん中を、
ありもしない羽で空を飛ぶ。

選者コメント　清水 穣

ネオコンポラ風日常写真のベースへ、ファンタジー、ストーリー、細部の対応、視角やサイズのゆさぶり、CG等々を上手くミックスさせていて、作りが丁寧。写真を見る、読むということを踏まえて、それをはっきりとしたイメージで表現している。

いつもの日曜日、いつもの海

千葉広一　Kouichi Chiba
「昨日／今日／明日」
“Yesterday/Today/Tomorrow”

ブック／A4 2冊／インクジェットプリント／118点

制作意図

描く事も、撮る事も、話す事も、たぶん生きる事も、中途半端なくせに表現だけはし続けたくて、永遠なんて無い事、残された時間を数えられる事、それが突然断ち切られるかもしれないことを実感して、日々溢れ出る思いを綴っています。

選者コメント　椹木野衣

写真と詩と工作のどこにも収まらない魅力が、ひとめぐりし、写真でしかあらわせない作者ならではの方法に消化され、実にうまくまとめられている。ともするとファンシーになりがちな手法だが、季節の無情な移り変わりや二度と戻らない時の感覚が、ひじょうに精緻にとらえられている。

内藤由樹 Yuki Naito
「それでも世界はうつくしい」
“still the world is nice”

ブック／A2／インクジェットプリント／34点

制作意図

世界をうつくしいと思いたい気持ちと、本当は世の中のしょうもなさに絶望している気持ちとの間に写真があります。写真に写ったものが綺麗だと思えた時にやっと安心して「うつくしい」ということができます。

選者コメント　佐内正史

生命力がある被写体はいいよね。撮っている人に紗がかかっていないから非常にクリアである。こういう人がいつ爆発するのか、それも見てみたいよ。

西村尚己　Naoki Nishimura

「魂の肖像」
“The challenger's spirit”

ブック／A4／印刷／55点

制作意図

自らの肉体と精神を極限まで追い込み、果敢に挑戦するアスリートたち。その姿は、人間誰もが無限の可能性を持っていることや人生において挑戦することの意義を教えてくれる。そして、生きる勇気と希望を与えてくれる。

選者コメント　清水 穣

笑ってしまうほど典型的なスポーツ写真だが、過剰かつ完璧に典型的であることに由来する恥ずかしさが、白と黒の輝き、汗の飛沫や筋肉のクローズアップとストップモーション、逞しい体の輪郭や皮膚の張りなどと結びつくことによって、メイプルソープばりのエロスを生じさせている。プリントもトーンも美しい。

藤井宏樹　Hiroki Fujii

「おかんとメモ」
“Mom’s note”

ブック／四ツ切／インクジェットプリント／87点

制作意図

僕の家のリビングには、おかんのメモがいつもある。
おかんとメモを約4年間撮り続けた。病気の時でも相変わらずおかんはおせっかいで元気なままだった。僕の一番好きな女性は間違いなくおかんだと思う。

選者コメント　佐内正史

チャットやLINEは、説明よりも具体的なことなんだよね。用件のみ。それがこの写真にあるメモとどこか似ているというか。それがイイ。

前谷開　Kai Maetani

「Kapsel 3099, Kapsel 613, Kapsel C-250, Kapsel 404」

1110×1400mm／インクジェットプリント／5点
A4／インクジェットプリント／21点
ブック／A4／38ページ

制作意図

「自分の中の寂しさと向き合うこと」について考えて制作しました。カプセルの中でのことは、個人的な、人には見せられないものです。しかし、それが写真になったとき、誰かと共有できるのではないかと思いました。

選者コメント　大森克己

絵を描くという行為が、太古の昔に人が洞窟で動物の壁画を描いていたことを思い出させる。そして、それをカプセルホテルという場所でやっているのがとてもいい。

保田敬介　Keisuke Yasuda

「STRANGER VIEW」

ブック／四ツ切／Cプリント／79点

制作意図

目先は知らない姿が景色。何とはなく、「ほんの景色にならないでよ」と。それは誰彼にとってわずかな景色なのかもしれません。

選者コメント　大森克己／ヒロミックス

大森：ちょっと運がいいというか、人と出会う才能がある。人間と向き合い写真が撮れる人であり、将来に期待したい。

ヒロミックス：人物が生き生きとしているポートレート。見ていて楽しくなります。現代的なところと昭和的なノスタルジーな部分があり、どの世代の人でも楽しめます。明るくて良い作品です。

山崎雄策　Yusaku Yamazaki

「さい子」
“SAIKO”

ブック／B4／インクジェットプリント／28点

制作意図

どこにも着地しないものを作りたかった。
ページをめくりながら眺める事を意識して制作したので、いつか本として発表できれば嬉しいです。

選者コメント　清水 穣

ヒッチコック「サイコ」仕立ての謎めいたストーリーが、巧みな演出のモノクロ写真で展開していく。トーンも適切。自分の写真をよく見ており、見る人が写真の中へ没入するときの様式、つまり隙間や奇妙な細部やシークエンスを上手に作っている。策士策に溺れるということなく、今後も活躍していって欲しい。

YOKNA PATOFA

「アセンション・リバー」
“Ascension river”

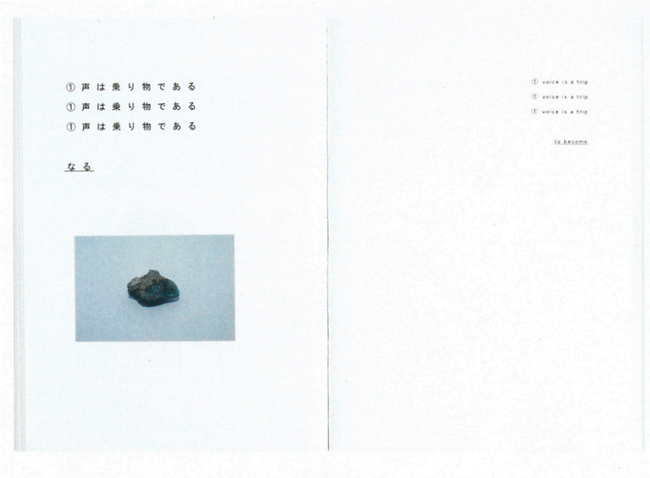
A4／カラープリント／49点

制作意図

ある連続未解決事件から、架空の物語が膨らんでいった。同じ時期にネットや消失点を含めて突き当たった感覚を混ざり合わせ、それを記憶のある地図にした瞬間は毎回、誰か何かへの呼びかけ、応答でもあった。

選者コメント　佐内正史

色気がある。男の子がいい顔しています。



渡邊聖子　Seiko Watanabe

「石の娘」
“Rocks and Women”

ブック／A5／オンデマンド印刷

制作意図

石の写真を撮影し、女性一人称のテキストを書いた。ここでは写真とテキストは関係を持たない。全く関係を持たない関係を作りだすことで、その裂け目のような関係をみること。写真を見ること。

選者コメント　大森克己

写真とことばの関係を考えることはとても大切なこと。でもやっぱりことばをさらりとかわして追い抜いていく刺激的な写真をもっと見たい。

写真新世紀2013年度 第36回公募

優秀賞選出審査会 総評

大森克己氏

デジタル写真の可能性や意味をもっと深く考えて作られた作品を見たい。あまりにも躍動感が無さすぎる。新しいメディアに相応しい身体性や態度を作品から感じられる事が非常に少なかった。昨年より人物写真が増えたことは興味深い。これはよい傾向だと思う。ここ数年、風景やアブストラクトなものばかりになっていて、人が写っているものが少なくなっていた。写真でも映像でもことばでも、人間に興味がいかないとつまらない。

大森 克己（おおもり かつみ）
写真家。1963年生まれ。1994年度（第9回公募）写真新世紀優秀賞（ロバート・フランク、飯沢耕太郎選）。主な写真集に『サルサ・ガムテープ』（1998年 リトルモア）、『encounter』（2005年 マッチアンドカンパニー）、『サナヨラ』（2006年 愛育社）、『Bonjour！』（2010年 マッチアンドカンパニー）『すべては初めて起こる』（マッチアンドカンパニー）など。展覧会に「日本の新進作家展Vol. 12：路上から世界を変えていく」（2013−2014年、東京都写真美術館）、「Now Japan」（2013−2014年、Kunsthal Amersfoort アメルスフォート、オランダ）がある。

佐内正史氏

全体的にカタイ印象で写真に色気がないですね。でも、紗がかかっていないクリアな作品がイイと思いました。なんていうのかな、ポケットに手を突っ込んで、新宿を歩いている際に、もしからまれたとしたら、「やってやる！」みたいな撥ね返す力、やる気が感じられないんですよ。もっと突っ込んで欲しい。突っ込んで行った先というのがもっといっぱいあるといいよね。なんのために応募するんだろう。なんのために撮るんだろう。覚悟がないとダメだよ。

佐内 正史（さない まさふみ）
写真家。1995年度（第12回公募）写真新世紀優秀賞受賞。常に写真の時代をリードし続け、出版した写真集は多数。2002年に写真集『MAP』で「第28回 木村伊兵衛写真賞」受賞。2008年には写真集レーベル“対照”を立ち上げ、2012年7月にその第13弾『度九層』（どくそう）を発売するなど精力的に活動中。

椹木野衣氏

作り込んだ絵画＝タブローのような作品が総じて減ってきている印象を受ける。いま写真を見る環境が、スマホやネットを通じてInstagramやTwitterに変わってきていることも背景にあるのではないか。写真はますます前後にあるイメージとの関係／無関係のなかで見られるようになってきている。ブックと平面との違いがあまり意味が持たなくなっているのかもしれない。

椹木 野衣（さわらぎ のい）
美術批評家。1991年に刊行した最初の評論集『シミュレーショニズム』が、90年代の文化動向を導くものとして広く論議を呼ぶ。また主著『日本・現代・美術』では日本の戦後を「悪い場所」と呼び、わが国の美術史・美術批評を根本から問い直してみせた。他に大阪万博の批評的再発掘を手がけた『戦争と万博』など著書多数。近年は岡本太郎の再評価や戦争記録画の再考にも力を注いでいる。現在、多摩美術大学美術学部教授、芸術人類学研究所所員。

清水 穣氏

ここ数年の受賞者、佐藤華連、赤鹿麻耶、原田要介の作風（ネオコンポラ、日常の断片、差し色のように鮮やかな色彩、クールな透明感…）に繋がるものは選ばないことにした。今年の傾向としては、1つのテーマ（窓、金髪の女の子、観光写真など）を決めて撮るいわゆるタイポグラフィーが目に付いたので、そこから1名を選んだ。また、コンセプトを前面に出した作品、つまり「自然」や「あるがまま」の写真にはしないぞという意志の伺える写真を選んだ。選んでみるとモノクロの作品が多くなったがそれは偶然。

清水 穣（しみず みのる）
写真評論家。1995年頃より現代美術・写真、現代音楽を中心に批評活動を展開している。1995年『不可視性としての写真：ジェイムズ・ウェリング』で第1回重森弘淹写真評論賞受賞。主な訳書に『ゲルハルト・リヒター写真論／絵画論』（1996年 淡交社）『シュトックハウゼン音楽論集』（1999年 現代思潮新社）。著書に『白と黒で、写真と・・』（2004年）、『写真と日々』（2006年）、『日々是写真』（2009年）『ブルラモン』（2011年、以上、現代思潮新社）などがある。現在、同志社大学教授。

ヒロミックス氏

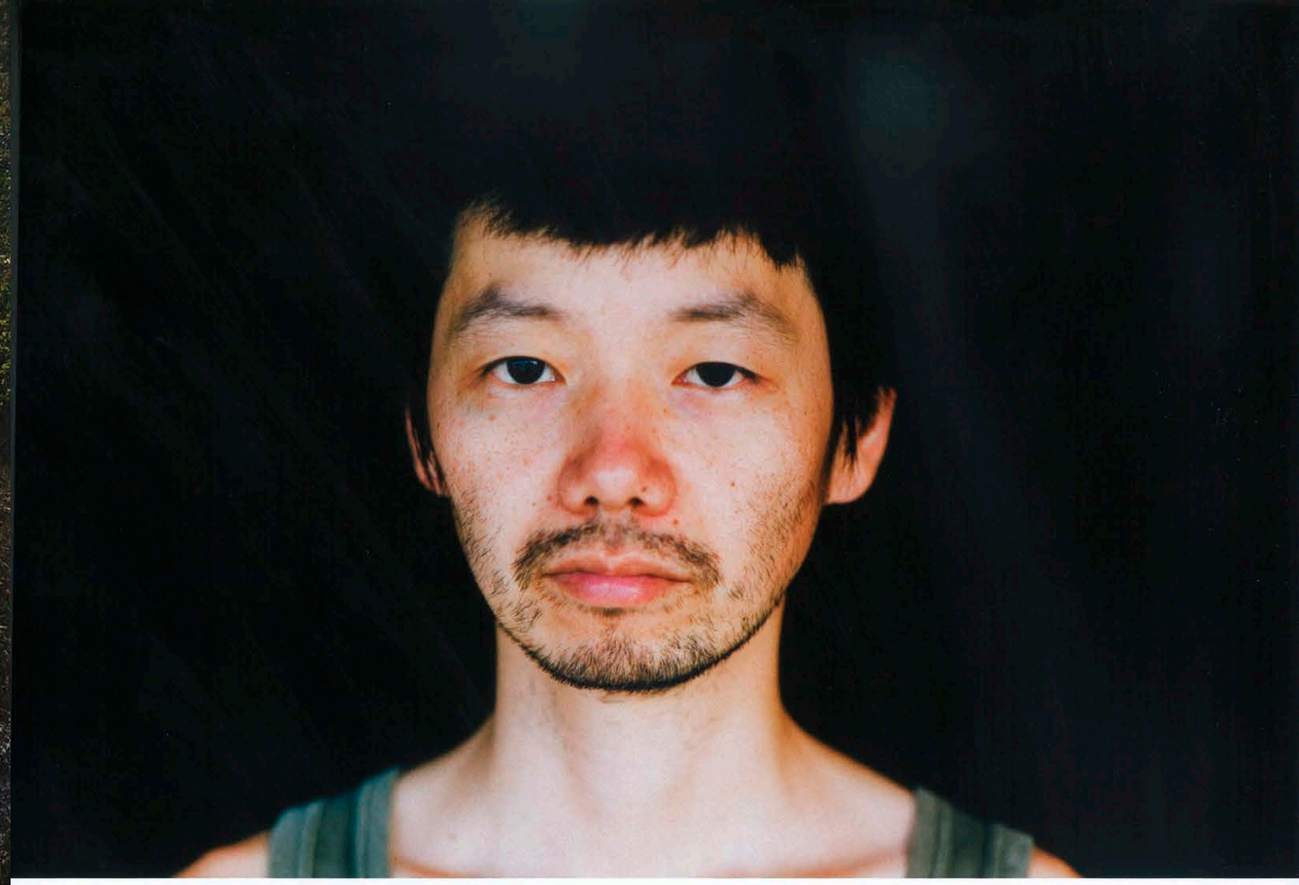
過去2年と比べると全体的に写真が明るくなってきているように感じました。応募される方は以前と比べて東京と関西からが多いようですが、その他の地域の方もぜひチャレンジしてほしいです。写真は、自分が今何に注目しているのかがわかるし、他人の目線からもどう見えるか、どう意識を持っているかも学べ、客観性を育みます。撮影は明るい方向へ意識がフォーカスされていく作用をもたらすので、人々の生活にとってプラスになるツールだと思います。また自分の記録を楽しめる文化です。
一般的に記念写真以外の写真を撮る行為は浸透しましたが、結局写真を見る力、編集する力はまだまだ浸透していません。この辺りが浸透すれば、もっと楽しくなるはずです。近年はネット社会の影響で活字に触れる機会が増え左脳的な社会になりつつありますが、その影響で逆に今後は写真や絵画などの右脳的コンテンツが盛り上がり、流行るのではないかなと思います。

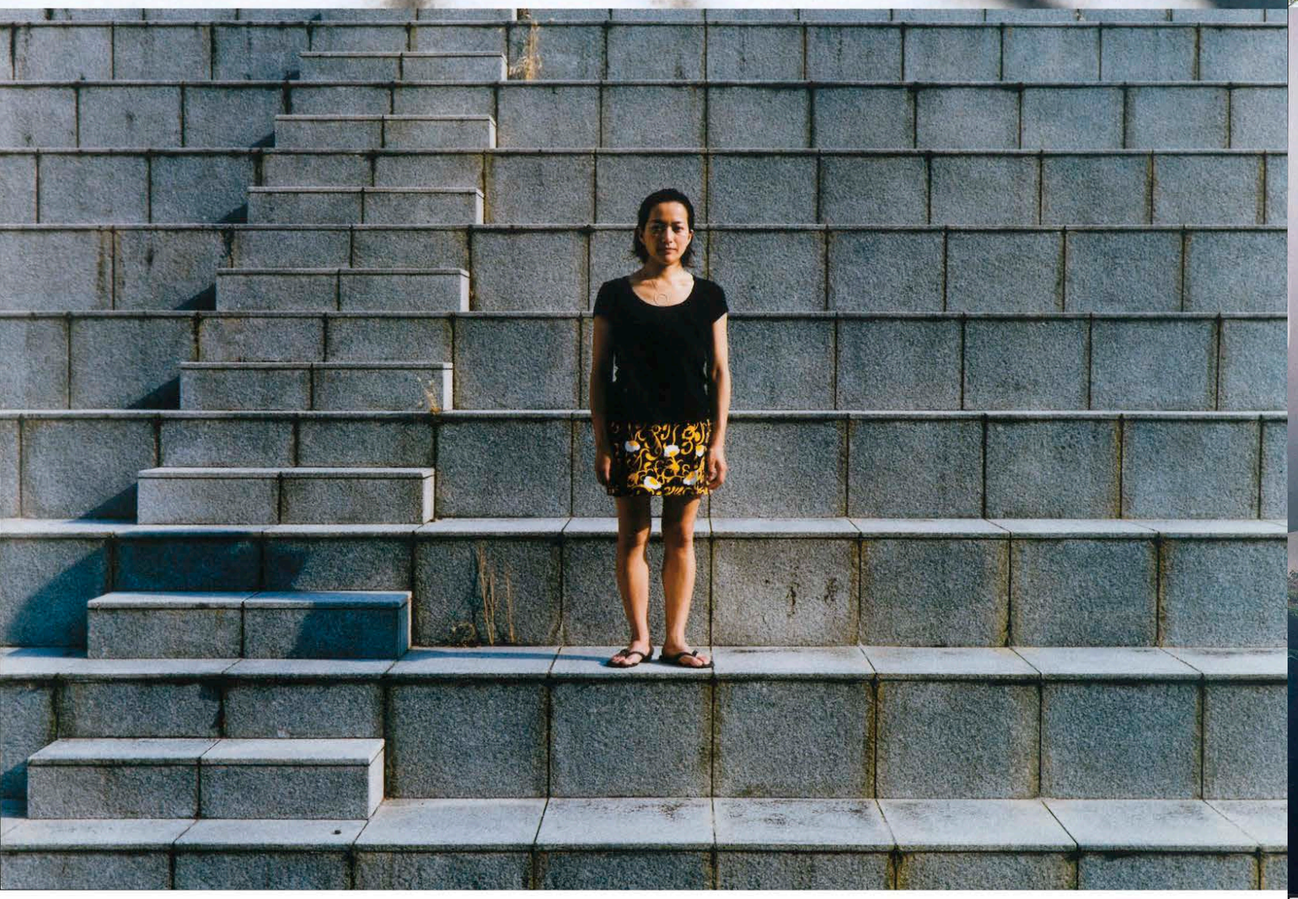
HIROMIX（ヒロミックス）
写真家。高校卒業後に応募した「SEVENTEEN GIRL DAYS」で写真新世紀1995年度年間グランプリを受賞。写真集『GIRLS BLUE』（1996）は写真界異例の部数を売上げ、ガーリーフォトブームの先駆けとして、その後の写真表現の在り方に大きな影響を及ぼす。2001年、写真集『HIROMIX WORKS』で「第26回 木村伊兵衛写真賞」受賞。2009年、個展「初春、心の輝き」、ショートフィルム「なんて素晴らしい君／HOW SPRENDID YOU ARE」他多数。

2012年度（第35回公募）グランプリ受賞者

原田要介　Yosuke Harada

「見るになる」





2012年度（第35回公募）グランプリ受賞

原田要介 インタビュー

被写体を存在感ある様子で捉えた「世界するもの」でグランプリを受賞。1年後の個展「見るになる」では、迫力の大判プリントに挑戦。確かな実力を持つ期待の若手写真家は、自身の写真世界をどのように深めていくのかお話をうかがいました。

―タイトル「見るになる」に込めた意味を教えてください。

今回の作品は、「世界するもの」のその続きとして制作しました。見たい見たいと思っていれば見たいものが見られるわけでもなく、かといって見ることをしないと写真はできないのだけれど、実際に何かを見てしまっているときというのは、見るということは意識していません。いい写真が撮れたことが分かるのも、いつも後になってからで、撮っている時は意識していないことが多いです。僕にとって見るということは、自分を外に垂れ流していくことで、あまりいろいろ考えない状態になるために写真をやっています。

―受賞後1年という限られた時間のなかで展覧会を考えるのはいかがでしたか。

展覧会を考えるにあたり、すでにある作品の中から夜の蠕（もぞ）を撮影したもので展示を行う予定でしたが、それじゃつまらないという話になって、せっかくだから何かもう少しできないかと思い、新しい作品も加えてまとめることにしました。結果としては、やっていることはそんなに変わってはいないけれど、手作業での大判プリントに新たに挑戦できました。

―手作業のプリントに挑戦したのはなぜですか。

自分は暗室作業が好きなので、大きなプリントもできれば自分でやりたかった。手焼きのプリントも制作環境的にはこれからどんどん難しくなってくるだろうし、自動現像機がなくても、自分でできるように習得するのも興味があったので、いい機会かなと思いました。初めは全く上手くいかなかったのですが、いろいろと試行錯誤して、何とかやれる手順や仕組みを知ることができて良かったです。

―作品はすべてフィルムで撮影しているようですが、デジタルで撮影することはありますか。

デジタル一眼は自分で持ったのはまだ1年目。副賞で頂いた「EOS 5D MarkIII」を使用しています。受賞前は常にカメラを持ち歩くということはなかったのですが、最近ではデジタルも持ち歩くようになりました。暗ければボタン一つで感度が上げられるし、ピントも拡大して見られるのでとにかく便利。どんどん撮れてすぐチェックできてしまうので、モニタでの確認で満足してしまい出力はまだほとんどしてないという状況です。まだ慣れないですが、両方とも使いながら慣れていきたいです。

―ポートレート写真は被写体の素の姿が捉えられているように思います。どういった方を、どんな場面で撮影しているのですか。

被写体は友人や彼女などで、知り合いしか撮っていません。大抵の場合、レンズを向けてもあまり構えなさそうな人に頼んで1対1で撮影します。そこにいてもらって、なるべく何もしないようにして、あとはゆっくり待つ。自分の意識が向こうに引っ張られて、向こうの視線もレンズを通してこちらに引っ張られて、被写体にも同じように見るになる状況が作られればと思っています。最初はみんな意識するのですが、徐々にぼーっと馴染んできてくれるので、その中で撮影する感じです。

―特に女性のポートレートは、内面の強さが感じられて魅力的です。

ありがとうございます。展示でも言われたのですが、運良く僕の周りにはいい顔の女性が多いのかもしれない（笑）。撮りたい人が沢山います。強い顔に写っていますけど、実際に会った時の印象はそうではなかったりもしますが。

―風景を撮影した写真をいくつか並べて見ていると、木々や直線などといった共通の要素が見えてきますね。

木々が盛りっと生い茂っている感じや、道路や駐車場の縞模様など、その時々で自分の気になっているものがやっぱりあって、無意識にたくさん撮影していると思います。今は光が強く当たっているものが気になっています。あまのじゃくだから、気づいてしまうとそうではないものを探したりもするのですが、もっといろんなものに反応できるようになりたいです。

―影響を受けた写真家やアーティストについて教えてください。

大学で指導を受けていた十文字美信先生の影響は大きいです。僕に見ることを考えるきっかけをくれた人で、見ることを分からなくした人です。そして、見ることをやめられなくなってしまった。年を重ねても衰えない好奇心や探究心など、見ていて自分もまだまだやらねばと刺激を受けています。他には、柴田敏雄さんやアントニオ・ロペス・ガルシアなど、目にダイレクトに入ってくる感じで大きい作品が好きです。あとは、本をできるだけ読むようにしています。現象学の入門書から始まり、中沢新一さんの本など、難しくてしっかり理解はできないのですが、自分の中のもやっとしたものがきちんと言葉で書いてあることもあって、継続してきちんと習慣にしたいです。

―主な表現方法として写真を選んだ理由を教えてください。

これまでにいろんな表現方法をかじってきましたが、それらの中で写真が一番よく分かりませんでした。写真については、コンセプトを決め込んでやっていくと行為が作業で終わってしまう気がしていて、あんまりはっきりさせることを避けています。曖昧で散漫な感覚はそのままで、分からなければ、分からないままに受け入れる。写真はシャッターを押せば撮れるので、特に自分に何かがなくても撮影できるし、カメラと被写体が写してくれる。分からないものは、よく分からないまま写ってしまうけど、そこに実際にあるものの強度みたいなものが何かしらあって、そこに自分を消滅させて同化させていける感じがいいのかもしれません。

―日本人の写真家として、世界に発信していきたいことはありますか。

海外で活動したり、世界に発信したいというのは、まだあまりよく分かっていないです。日本を一度も出たことがないし、まだ目が届く範囲内でも気になることは沢山あって、どちらかというと何も無い所でも満足できるようになりたい。新しい何かを探すというよりは、そこにあるものを見ていく深度、強度を高めたいです。つましく制作を続けて、何か機会があれば展示していくようにできればと思っています。

―今後の目標を教えてください。

満足できる完全なプリントを詰めていくこと。そのために撮影でも暗室でも、まずは機材など含めて技術的な知識を深めていきたいです。デジタルの撮影の方は、いろいろ試して遊んでみたいです。あとは、たくましい眼を鍛える！

写真新世紀2013年度 第36回公募

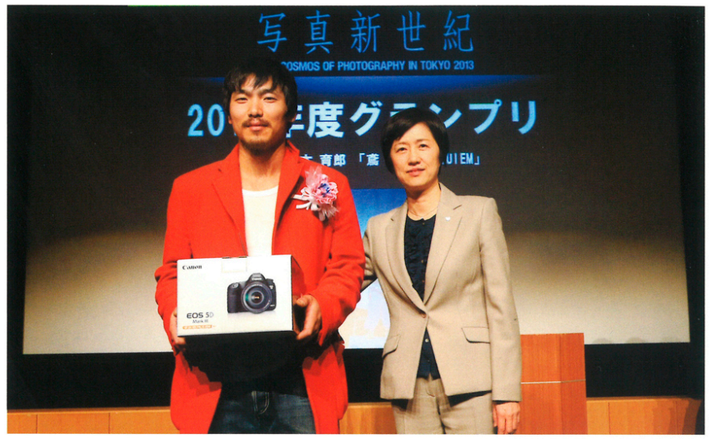
グランプリ選出公開審査会報告

2013年度（第36回公募）グランプリ選出公開審査会が、11月8日（金）、東京都写真美術館1階ホールにて行われました。応募者数1,114名の中から優秀賞を受賞し、グランプリ候補となったのは、安藤すみれ氏、海老原祥子氏、鈴木育郎氏、水野真氏、藪口雄也氏の5名。審査会では、候補者全員がプレゼンテーションを行い、審査員との質疑応答に臨みました。その後別室にて討議が行われ、審査員の合議により鈴木育郎氏がグランプリに決定しました。

早くも冬の訪れを感じる11月8日（金）。期待と緊張感が高まるなか、午後3時30分に審査会が開会しました。

まず審査員の大森克己氏（写真家）、佐内正史氏（写真家）、椹木野衣氏（美術批評家）、清水穣氏（写真評論家）、ヒロミックス氏（写真家）の5名が着席し、続いてグランプリ候補者の5名（優秀賞受賞者）が緊張した面持ちで登壇。その後、キヤノン株式会社渉外本部 部長 木村純子より、開会の挨拶がありました。

優秀賞受賞者でありグランプリ候補者である5名は、それぞれ持ち時間10分の中でプレゼンテーションを行い、自らの言葉で作品の背景や制作意図、作品への思いを語りました。審査員からは、作品に対する賛辞や鋭い批評、作者への質問などが寄せられました。



安藤すみれ 「Escape」

この作品は、自分を客観的に見つめるために作りました。私はまだ、自分が何者なのか、何をしたいのか、何を求めているのかがわかっていません。自分に対して違和感を感じることも多いです。

今、私は高校生です。学校はいろいろなことから私を守り、支えてくれます。無知で非力な私は、そんな学校をありがたいと感じています。しかし、学校が嫌いな自分もいます。制服や学生証は私を縛り付けているように思え、同じようなことを繰り返す日々が退屈で、窮屈で、心が爆発しそうになることもありました。でも、怒られることはどうしても怖かった。怒られないように自分の気持ちを隠してニコニコしているうちに、自分自身がよくわからなくなっていったのだと思います。

私は「このままでいいのか」と疑問を感じ、自分と向きあってみようと思って撮り始めました。被写体はすべて自分です。三脚を立て、リモコンを使って撮影しました。撮影中、カメラが人であるかのように感じていました。

カメラとの距離感、シャッター音が聞こえる度に不安になる気持ち、「見られている」という錯覚。それらが他人と接するときの自分の気持ちとよく似ていたのです。

学校という檻から逃げたい自分、限られたことしか知らない自分、一人で悩み、ほかのことを一切考えない自分。何度もエスケープしようとしたのに、どうしてもできない。逃げ出したいという理想と、逃げ切れていない現実の中で、私は迷子になっています。

作品のタイトルは、「Escape」することで、何か意味のある力を持った、特別な自分になりたいという思いを込めました。私にとって写真とは、何よりも素直になれるもので、自分とは何かを探せる術でもあります。撮影時はあまり深く考えずシャッターを切っていましたが、撮り終わって作品と向き合うと、「自分はこう考えていたんだな」とか、「こういうヤツなんだ」と初めて気づかされました。そして自分はとても狭い世界にいるんだということがわかり、恥ずかしい気持ちでいっぱいでした。

でも、それが自分の現状です。今も私は自分自身がよくわからないし、恐怖や不安もあり、「Escape」できていません。でも、写真を撮ることを通していろんな経験をして、考え、吸収していくうちに、今の自分から本当の意味で「Escape」でき、新しい特別な自分に出会えるのではないかと思っています。

椹木氏：自分を客観的に見るために写真を撮り始めたということですが、客観的というよりは演出的な作品が多いと感じました。

「もがく」「叫ぶ」といった行為は心象を表すわかりやすい記号であり、普段の心にある思いは、必ずしもそのようにわかりやすくは現れないものです。

また、安藤さんの作品は、自分を縛り付けている「学校」があったからこそ成り立っている面もありますよね。卒業してもまた別の枠組が待っていますが、「学校」がなくなったときの作品も見てみたいと思いました。

海老原祥子 「記念写真」

私の作品は、日本各地を旅して、団体記念写真屋さんに撮ってもらった写真を集めたものです。観光地に一人で行き、写真を撮ってもらい、買い上げる。こうして全国を回ったら、新しい日本の風景が見えてくるんじゃないかと思ったことが始まりです。

出かけるときは、まずインターネットで団体写真の撮影をやっている観光地を調べ、問い合わせをしてから行きます。現地でお願いをすると、たいてい変な顔をされたり、驚かれたりします。

しかし交渉が成立すれば淡々と撮られます。時々、楽しんでやってくれるところもあります。プリントができるまで待ち、写真1枚が入った紙袋を渡され、代金を払って終わりです。この5年に及ぶ旅の記録は、28県47枚になり、ようやく日本地図の半分以上が埋まりました。写真を見ると旅を思い出します。

各地の名産や美味しい食べ物、出会った人、美しい風景、珍しい建造物。それらはただの記念写真の背景ではなく、風や匂いすら呼び覚ますほどの、私が確かにそこにいたことを示す記録です。

この作品はまだ完成ではありません。日本地図がすべて塗りつぶされたとき、私がそこに何を見るのか。それが凄く楽しみです。

写真は基本的に1枚ずつしかありません。このことをふまえ、どのように見せるかを考えたとき、写真美術館の壁はとにかく高く、広く、私の小さな写真を並べただけでは「塊」にしか見えないと思いました。

そこで、「閉じられた空間」を作って強制的に作品と鑑賞者の距離を短くするというプランを提出しました。作品と鑑賞者のプライベートな空間が実現できたら、1枚1枚を確実に観てもらえるのではないか。また、その関係性をさらに意識してもらうために、展覧会でよく使われる額などの手法を避け、レイヤーのように重ねることで被写体の没個性が浮き出るようにしました。

この展示方法を通して、世界で1枚であることや、実際に自分が行った証であることも感じてもらえればと思っています。

清水氏：非常によく考えられた作品で、展示方法も練られていると思いました。

昔ながらの鄙びた風景で、向こう側が書き割りだったりして、その土地の風や匂いといったものは感じられず、構図も背景もきわめて「昭和」。

もはや命を失ったものをコレクションしているような、しかもそこに同じ人がいて、バスガイドのような微笑みを浮かべているというワンパターンな感じが面白いと思いました。こうした風景は、急がないと、どんどん少なくなっているんじゃないでしょうか。

プログラムがしっかりしている分、「やっつけ仕事」的な部分もあると思いますが、終わったときにはまた違ったものが見えてくるかもしれませんね。

鈴木育郎 「鳶・CONSTREQUIEM」

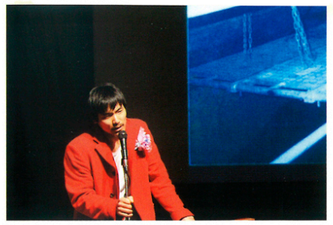
自分は今、鳶職をしながら写真を撮っています。高所作業のための足場を命綱なしで作ったりする危険な仕事で、まだ3年目の自分は一流の鳶ではないため、冷や汗でびしょびしょになりながら耐えています。そんなこともあり、実はこの仕事を辞めたいと思っています。

自分は自然豊かな浜松の出身で、写真をやるため東京に来ました。自分には田舎の生活が一番合っているし、田舎でゆっくり暮らしたい。しかし、田舎には生活のための仕事がありません。そして、写真をやるためにはお金がいる。こうした矛盾を抱えています。

この矛盾の中で撮っているのが今回の作品です。「本当の鳶」が鳶を撮ったら、鳶が一番格好良く見えるやり方で撮ると思います。しかし自分の場合は、太陽光の当たり具合なんかばかりが気になってしまう。鳶職は格好いい人が多いので、格好良く撮りたいが、自分が鳶職になりきれていないため、すごく距離感があります。常に撮るのではなく、本当にタイミングがいいときに撮る。職業カメラマンが現場にお邪魔して撮らせてもらうのとは違い、一緒に働いている同僚が、「写真で食っていくのか鳶で食っていくのかはっきりしろ」「お前も鳶、本気でやれよ」と言われながら、そういう人たちにカメラを向ける。向こうもあまりいい気はせず、照れくさい。だから、タイミングがいいときにしか撮れないのです。

作品は日常生活をメインに、「鳶でお金を稼ぎ、写真をやっている奴の日常」を撮り続けました。決して鳶のカタログにはしたくないという思いがありました。こんな矛盾の中でもなぜ鳶なのかというと、結局はお金を稼ぐことが前提で、でも鳶職は独特で特別だからです。以前、すごく格好いい親方に出会い、どうしてもその人の下で働きたいと思いました。写真をやりながら、ということも受け入れてくれて、1年間撮り続けて作品が完成しました。

しかし、やはり自分は鳶じゃないな、という思いがあります。今の職場を辞めてもっと自由に行きたいところに行き、そこで日雇いの仕事をして（たぶん鳶ですが）、転々として、その土地の空気や人、食べ物、文化などを体感したい。写真が自分を後押ししてくれて、写真から勇気をもらっています。しかし、ただ撮っていればいいというのではなく、鳶として仕事をきちんとやり、認めてもらって、その場所で日々何を感じて次はどこへ行くかを直感で決めていく。まだ最終的にやりたいことはわかっていませんが、何が本物で、何をしたいのかを、写真と一緒に探っていきたいと思っています。



大森氏：自分の聞きたいと思っていたことが解決できた、いいプレゼンでした。

写真が矛盾の塊だというのはとてもよくわかるし、「たしかに矛盾しているよなあ」と思いながら見ていました。そこがいいと思いました。

ブックには個人的に好きな写真、印象的な写真がたくさんありました。

「光の当たり具合が気になる」という話がありましたが、自分が良いと思ったのはまさにそういう写真です。それらがあまり選ばれず、展示されていなかったのが残念です。

水野 真 「よそからきた」

優秀賞を受賞して、僕は「なぜ撮るのか」について考えました。その答えは、「写真になったとき、どんなふうになるのか気になる」でした。それまでは特に「なぜ」を考えることはありませんでした。

カメラを持ち、外に出て人に会い、動く。今回はフィルムで撮りましたが、デジタルから写真を始めた僕はどんなふうに写っているかがわかっているところから出発していて、だから「できるまでわからない」ということがとても魅力的でした。

今までは絞り込むことが多かったので、今回は開放にしてピントをしっかり合わせ、丁寧に

撮ろうと思いました。しかし、いざ外に出ると、ピントを合わせたくなるものが近所にはあまりなかった。だだっ広い田舎は、どこにピントを合わせていいかわからなくなります。とにかく歩き、通り過ぎて疲れた頃にまた戻ってきて、ということを繰り返しました。

あるとき、ちょうどいい距離感の写真が撮れました。自分では「田舎の距離感」だと思っています。50ミリレンズで、実際は被写体にもう少し近いところで撮っているのですが、写真になると少し遠く感じる。それが、外から見るよりそんなに温かくない田舎の距離感だなと思いました。

歩いていると、縦とか横とか、そういうことが気になってきます。都内では、縦で撮れるものがすごく多いのですが、田舎だと高い建物がなく空が入り込むため角度が決まらなかったり……。まるで初心者のようなことを言っていますが、そういうことが自分にとってはとても大事なのです。

カメラを始めて4年。ここ2年は震災と、故郷・福島とともにありました。避難やさまざまな理由で、人がやってきては去っていき、混じり合い、自分の住む場所は人も建物も変わりました。

この写真を撮っている最中、僕は近所でよそ者に間違われ、ハッとしました。自分は変わらなくとも、住んでいるところは変化している。それは、当事者性の再確認でした。

故郷にはさまざまな人が写真を撮りに来ています。自分はあの日から、考える前にカメラを持ち、体が動いていました。生活の中でそのすべてが通り過ぎ、僕も通り過ぎるように撮ってきました。

今、改めて自分にとっての写真について考えるときなのかと思っています。ささやかで、さりげない何かを残したいと思います。自分はこれからも道ばたで撮り続け、未来を向いていきたい。この個人的にも見える写真群を、新たな始まりにしたいと思っています。

佐内氏：非常によく見ていて、「四隅のある」写真。そして、写真以外のことが何もない、というのがいい。確かに東京では縦が多くなり、田舎は横が多くなるというのもよくわかります。人を撮るときも、距離があるときは横で、だんだん寄っていくとあるときから縦になる。それでも横で撮りたい場合もありますよね。そういうことも楽しいと思います。

藪口雄也 「コンテナの中の瞳」

私の作品は、動物の保護施設の犬の表情を撮影したものです。4年間いくつかの施設に協力していただき、撮影を続けてきました。

きっかけは、大通りを放浪していた一匹の犬との出会いです。全身の毛は汚れ、あばら骨が浮き上がるほど痩せ細り、近寄った私を威嚇するでもなく、甘えるでもなく、私と夜道を散歩しました。犬を保護してもらおうと警察署に向かいましたが、保護の際、それまでおとなしかった犬が激しく抵抗したのです。保護したことは良かったのか？ もしも保健所送りになれば死が待っている。そんな重い気持ちを引きずり帰宅すると、わが家の愛犬が私を迎えてくれました。

1年後、愛犬が亡くなりました。妹のようにずっとそばにいた犬。愛犬の瞳と放浪犬の瞳が次々に浮かんできました。そして、私は地元の保護施設を訪れました。

ドアを開けたとき、たくさんの瞳がいっせいに私をとらえました。悲しみ、怯え、戸惑い、そして希望。その表情は、私が知っている飼い犬のものとはまったく違っていました。私の呼吸は乱れました。

今、彼らは一つの箱の中で呼吸し、命をつないでいます。彼らの過去はさまざまですが、彼らは明日を生きるために今日を生きています。放棄された心の闇を推し量ることは難しい。だから、私はあえて正面から彼らの瞳と向きあいました。彼らの表情にこだわり、顔だけに絞って撮影を続けていきました。彼らの瞳と交わることで、そこに言葉が生まれると感じたからです。

表現方法をモノクロにしたのは、犬の毛の色が持つイメージを払拭するためです。情報

量を少なくすることで彼らの瞳や表情が際立つと感じたからです。

写真は1枚の紙切れです。しかし、そこには見る側と、写り込んでいるもの、そして撮影者との、言葉を超えた言葉が凝縮しています。それぞれの過去や未来、さまざまな境遇が、そこに数え切れないほどの魂を送り込み、たくさんの言葉が溢れ、一つの物語ができる。そんな写真を撮りたいと、さまざまなものにレンズを向けてきました。

美しいもの、哀れなもの、グロテスクなもの、異次元の不思議さを持ったもの。存在するすべてのものは言葉で溢れています。一枚の写真を内と外から見つめ合うとき、命と命のつながりが一つの世界を作ると信じています。

これからもたくさんの瞳と向きあい、そこに生まれる言葉と命を撮影していきたいと思っています。

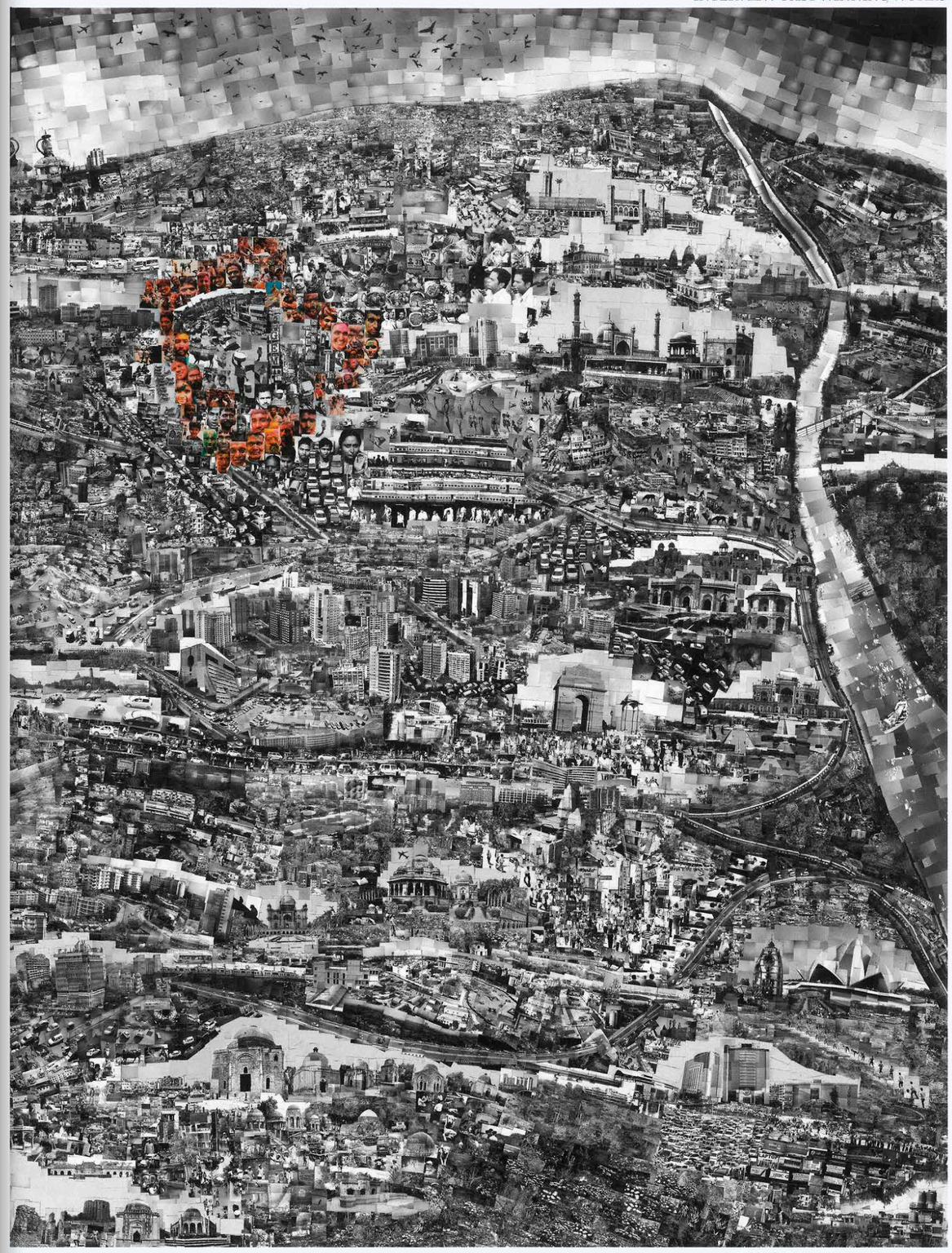
ヒロミックス氏：人間と動物の共存という社会の大きな課題を取り上げていることから、この作品を優秀賞に選びました。ペットの殺処分問題は10年くらい前から話題になっており、里親を探すボランティアも盛んになってきましたが、改善すべき点はまだまだあると思います。

作品は画力があって力強く、いいと思いました。犬の瞳はレンズを見ているようで、その向こうにいる人間を見ている、見定めているようにも思えます。少し怖い感じもありますが、こうした問題はまだまだ知らない人も多いし、考えるきっかけの一つになればと思いました。

写真新世紀の歩み

「写真新世紀」は、1991年に年4回の公募で始まりました。1994年から年2回の公募、そして現在では年1回の公募に集約され、36回を数えるまでになりました。応募者数も毎回1,000人を超える規模に成長し、国内外で広く活躍する優秀な写真家を多数輩出してきました。また、受賞作品の展示や受賞者のトークショーでも多くの来場者を集め、「写真の現在」を広く伝える役割を担っています。

年度	応募総数	グランプリ	優秀賞	優秀賞	
				レギュラー	ゲスト
1992 第1〜4回公募	483人	木下伊織	岩崎昌弥／小川嘉朗／奥谷佳子／オノデラユキ／今 義典 清水麻弥／辰本まこと／千葉鉄也 ノニータ（谷野浩行）／野村 浩／山本美奈	荒木経惟（写真家）／飯沢耕太郎（写真評論家） 南條史生（森美術館館長）	――――
1993 第5〜8回公募	505人	市川綾子	遠藤年勇／大橋 仁／金城民子／河野安志／高橋ジュンコ 土井弘介／中山英輔／西 光一／野村 浩／宮本知保／茂木綾子	荒木経惟（写真家）／飯沢耕太郎（写真評論家） 南條史生（森美術館館長）	――――
1994 第9・10回公募	703人	熊谷聖司	大森克己／小倉英三郎／金子亜矢子／白土恭子 ジャン＝クロード・ベレグー／リン・デルピエール	荒木経惟（写真家）／飯沢耕太郎（写真評論家） 南條史生（森美術館館長）	ロバート・フランク（写真家）／坂田英一朗（写真家）
1995 第11・12回公募	456人	ヒロミックス	A・R・T Puff／坂本 浩／佐内正史／柴原三貴子／野沢文子 パトリシア・ガバス／本田かな／リン・デルピエール	荒木経惟（写真家）／飯沢耕太郎（写真評論家） 南條史生（森美術館館長）	ジャンクロード・ルマニー（仏国立図書館コンセルバトゥール） 浅葉克己（アートディレクター）
1996 第13・14回公募	587人	野口里佳	加藤直司／菅野 純／黒瀬英文／鏑川実花 早船ケン／吉田 優／ロス・バン・ホーン	荒木経惟（写真家）／飯沢耕太郎（写真評論家） 南條史生（森美術館館長）	伊島 薫（写真家） 椎名 誠（作家）
1997 第15・16回公募	537人	矢島慎一	伊藤トオル／ヴァレリー・ブラン 慶／高城典子／山本 香／山本耕司	荒木経惟（写真家）／飯沢耕太郎（写真評論家） 南條史生（森美術館館長）	カンシ・リー（写真家） 大森大道（写真家）
1998 第17・18回公募	771人	柏 亜矢子	池田宏彦／岩崎マミ／黒瀬康之／佐藤純子 ヴェロニック・ジリア／藤原江理奈／守田衣利	荒木経惟（写真家）／飯沢耕太郎（写真評論家） 南條史生（森美術館館長）	ベルナール・フォコン（写真家） ホンマタカシ（写真家）
1999 第19・20回公募	759人	安村 崇	伊賀美和子／遠藤礼奈／岡部 桃／田邊晴子 長尾智子／矢ヶ崎祐子／吉田 優	荒木経惟（写真家）／飯沢耕太郎（写真評論家） 南條史生（森美術館館長）	サラ・ムーン（写真家） 長野重一（写真家）
2000 第21・22回公募	944人	中村ハルコ	佐藤 篤／佐野方美／澤田知子／鈴木 良 谷口正典／中村年宏／山田大輔	荒木経惟（写真家）／飯沢耕太郎（写真評論家） 南條史生（森美術館館長）	横尾忠則（写真家）／倉石信乃（写真評論家） ジル・モラ（アートディレクター）
2001 第23・24回公募	881人	――――	佐伯慎亮／新沢もも／たけむら千夏 中谷理子／中西博之／西都友典／吉岡佐和子	荒木経惟（写真家）／飯沢耕太郎（写真評論家） 南條史生（森美術館館長）	木村恒久（写真家） 都築響一（写真家）
2002 第25回公募	1,004人	吉岡佐和子	岡本英理／鍛治谷直記／SABA（高橋 宗正・中島 弘至） ヨシダミナコ／吉本尚義	荒木経惟（写真家）／飯沢耕太郎（写真評論家） 南條史生（森美術館館長）／森山大道（写真家）	マーク・リブー（写真家） 東松照明（写真家）
2003 第26回公募	1,150人	内原恭彦	植本一子／加藤純平／藤田裕美子／法福兵吾 ヤマダシュウヘイ／吉本尚義	荒木経惟（写真家）／飯沢耕太郎（写真評論家） 南條史生（森美術館館長）／森山大道（写真家）	マーティン・パー（写真家） 鈴木理策（写真家）
2004 第27回公募	1,087人	準グランプリ 河村素代 滝口浩史	大庭英亨／ふじいあゆみ／山下 豊／吉本尚義	荒木経惟（写真家）／飯沢耕太郎（写真評論家） 南條史生（森美術館館長）／森山大道（写真家）	ケビン・ウェスティンバーグ（写真家） やなぎみわ（美術家）
2005 第28回公募	1,324人	小澤亜希子	新垣尚香／梶岡祿仙／とくたはじめ 西野壮平／林口哲也＋松村康平／吉本尚義	荒木経惟（写真家）／飯沢耕太郎（写真評論家） 南條史生（森美術館館長）／森山大道（写真家）	ウィリアム・エグルストン（写真家） 鏑川実花（写真家）
2006 第29回公募	1,505人	高木こずえ	喜多村みか＋渡邊有紀／清水朝子／Palla 辺口芳典／山田いずみ／吉本尚義	荒木経惟（写真家）／飯沢耕太郎（写真評論家） 南條史生（森美術館館長）／森山大道（写真家）	日比野克彦（写真家） ボリス・ミハイロフ（写真家）
2007 第30回公募	1,277人	準グランプリ 黒澤めぐみ 託間のり子 中島大輔	黒澤めぐみ／詫間のり子／中島大輔 青山裕企／田福敏史／中里慎也／吉本尚	荒木経惟（写真家）／飯沢耕太郎（写真評論家） 南條史生（森美術館館長）／森山大道（写真家）	榎本了壱（アートディレクター）
2008 第31回公募	1,517人	秦 正則	岡部東京／小山航平／菅井健也 保谷綾乃／元木みゆき／吉本尚義	荒木経惟（写真家）／飯沢耕太郎（写真評論家） 南條史生（森美術館館長）	榎本了壱（アートディレクター） 大森克己（写真家）／野口理佳（写真家）
2009 第32回公募	1,340人	クロダミサト	Adam Hosmer／杉山正直 高橋ひとみ／安森 信／吉本尚義	荒木経惟（写真家）／飯沢耕太郎（写真評論家） 南條史生（森美術館館長）	榎本了壱（アートディレクター） 鏑川実花（写真家）
2010 第33回公募	1,276人	佐藤華連	齊藤陽道／柴田寿美／高木考一／谷口育美	大森克己（写真家）／佐内正史（写真家）／樋木野衣（美術批評家） 清水 穣（写真評論家）／鏑川実花（写真家）	
2011 第34回公募	1,305人	赤鹿麻耶	奥山由之／木藤公紀／パトリック・ツァイ 山田真梨子／谷口育美	大森克己（写真家）／佐内正史（写真家）／樋木野衣（美術批評家） 清水 穣（写真評論家）／ヒロミックス（写真家）	
2012 第35回公募	1,325人	原田要介	柿田真吾／吉楽洋平／長谷波ロビン／浜中悠樹	大森克己（写真家）／佐内正史（写真家）／樋木野衣（美術批評家） 清水 穣（写真評論家）／ヒロミックス（写真家）	
2013 第36回公募	1,114人	鈴木育郎	安藤すみれ／海老原祥子／水野 真／藪口雄也	大森克己（写真家）／佐内正史（写真家）／樋木野衣（美術批評家） 清水 穣（写真評論家）／ヒロミックス（写真家）	

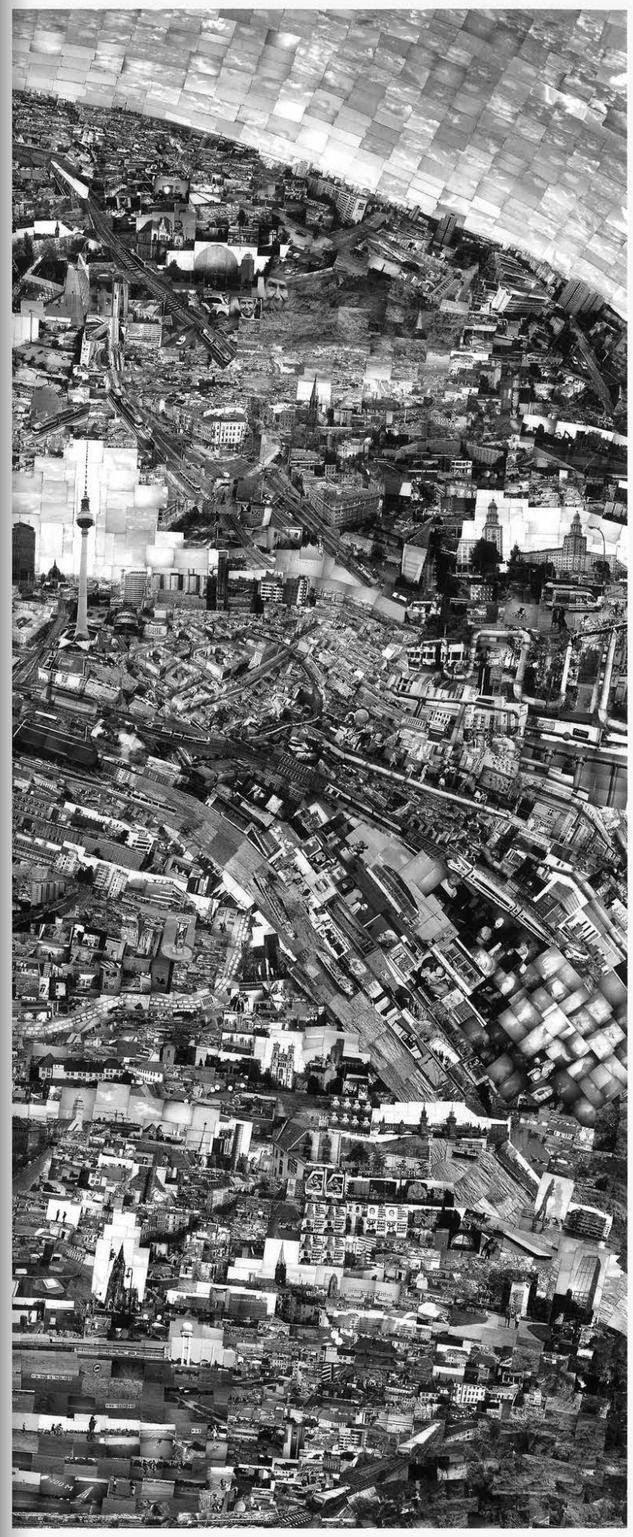


Delhi, © Michael Hoppen Contemporary

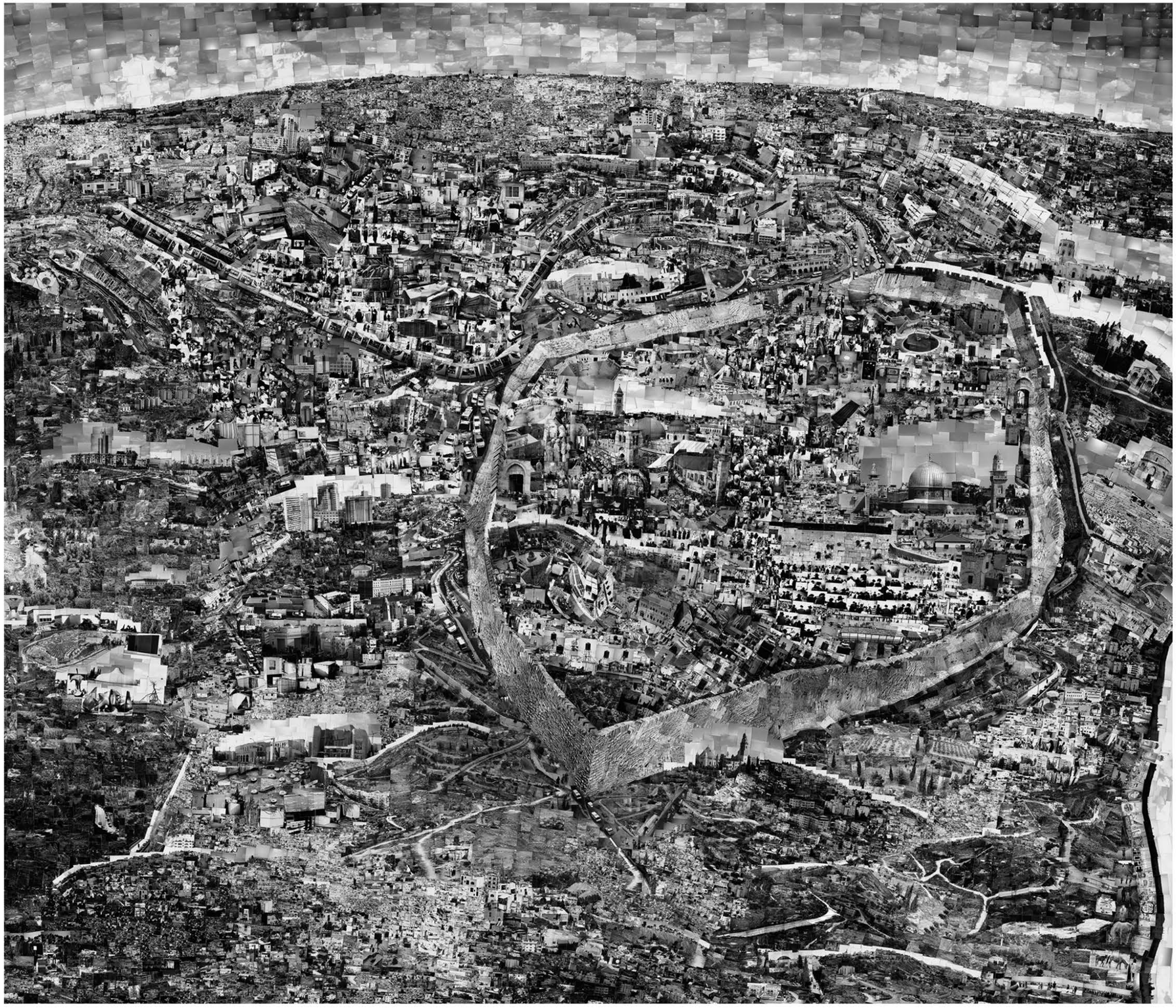
2005年度（第28回公募）優秀賞

西野壮平　Sohei Nishino

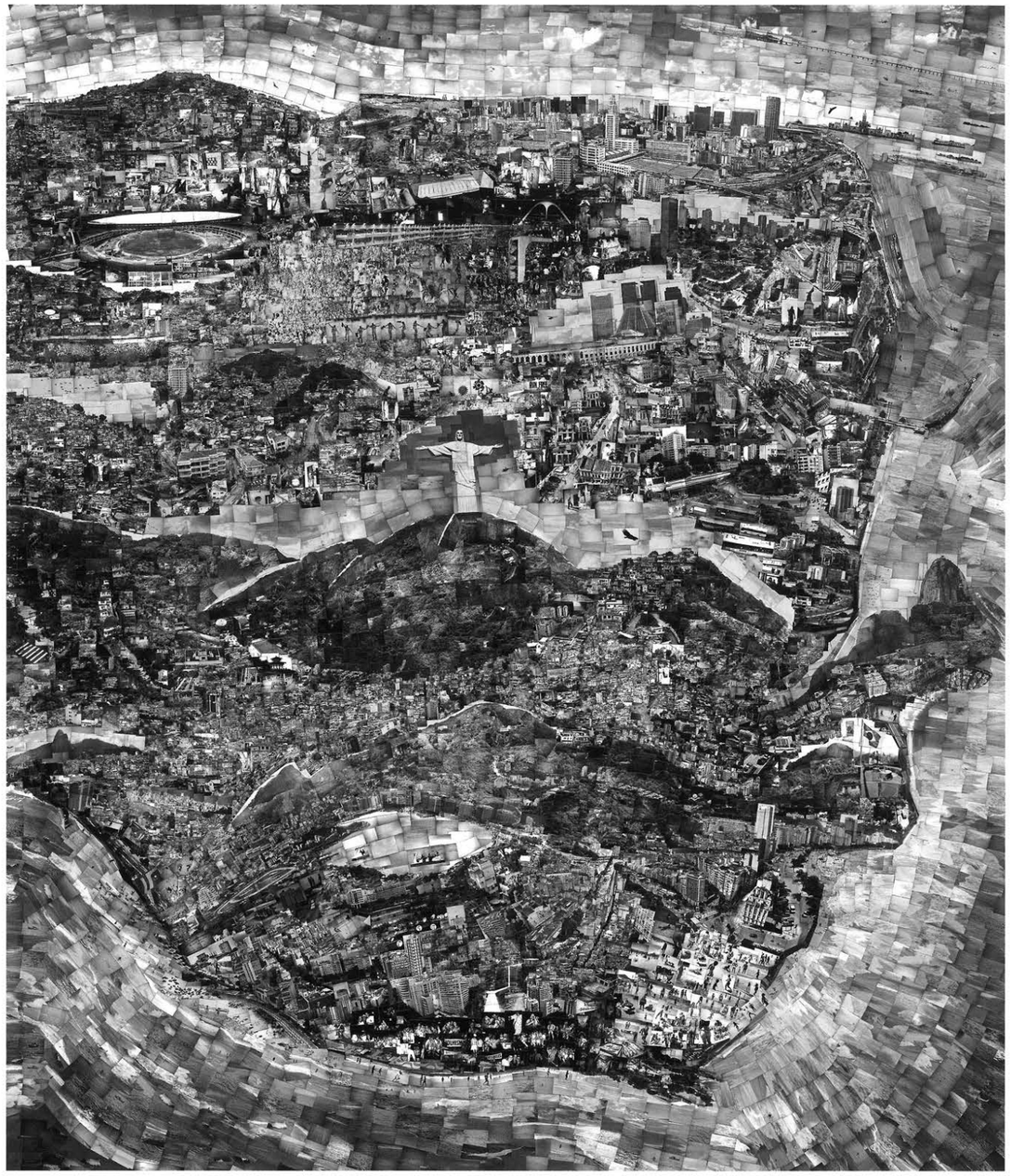
「ジオラママップ」“Diorama Map”



Berlin, ©Michael Hoppen Contemporary



Jerusalem, ©Michael Hoppen Contemporary



Rio de Janeiro, © Michael Hoppen Contemporary

2005年度（第28回公募）優秀賞受賞

西野壮平 インタビュー

コンタクトシートのコラージュにより都市を構築した「Diorama Map」で、2005年に優秀賞を受賞。
その後も国内外の都市を作品化し続ける西野壮平に、制作の実態や受賞後の活動についてお話をうかがいました。

―「Diorama Map」の制作には、膨大な写真とそれを張り合わす細かい作業が必要ですね。一つの作品に、どれくらい時間がかかりますか。

頑張っても年間３枚ほどしか制作できません。１枚の写真を撮ってそれをプリントするという普通の写真の作業と比べると、制作時間に大きな差がありますね。

―今までにいくつの「Diorama Map」を制作しましたか。

16点ほどになります。なかには２度制作している都市もあります。今は10年前に制作した《Tokyo》の2014年版を改めて制作しているところです。

―10年前に制作した《Tokyo》を、新たに制作しようと思った理由を教えてください。

2004年に《Tokyo》を制作した時は関西に住んでいたので、東京には通って撮影しました。その後、東京に住んでみて自分にとってのイメージが変わったし、東京という都市自体も大きく変わりました。その変化を、表現を通して見てみたいと思ったのです。さらに10年後もまた作りたいですね。

―10年後は東京オリンピックを経て、さらに都市の様子も変わりそうですね。

そうですね。今回の作品では今年取り壊しが予定されている国立競技場も撮影しました。撮影するのは最後だな、と思いながら。

―海外の都市を撮影する時は、また感覚が違うと思います。海外では、どれくらいの期間滞在し撮影するのでしょうか。

だいたい1ヶ月半くらいです。滞在の始めの1週間は、カメラを持たずにただ歩いて、アシスタントを探したりする時間にしています。アシスタントはプロにお願いするのではなく、時間に余裕のありそうな若い人に声をかけて、一緒に街を歩いてガイドをしてもらっています。そうやって知らない人とコミュニケーションをとることで、その人の友達を紹介してもらったり、人の輪が広がっていくのです。僕がずんずん裏路地に入っていくので、街のことをよく知っているはずの現地の人にとっても「こんなところがあったんだ」と発見があるようです（笑）。

―現地でもコミュニケーションがとれるということは、英語が得意なんですね。

撮影したいという意志表現など、最低限は身につけています。ボゴタで作品のプレゼンテーションをする時は、通訳をつけるから母国語で話してもいいと言われたのですが、英語とスペイン語の両方に訳すタイムラグが嫌だったので、英語で説明しました。海外ではパーティーで意見を交わしたり、レクチャーやワークショップで話したり、アーティストとしてコミュニケーションする機会が日本よりも多いと感じています。

―これから撮影してみたい場所はありますか。

５月からアムステルダムに撮影に行きます。できることなら、世界中すべての街の「Diorama Map」を作りたいです。

―作品の写真はすべて、自分で貼り合わせているのですか。また、撮影した写真の中に作品にならないピースはありますか。

やむを得ず外れてしまったり、ピースとピースの間に埋まってしまうところもありますが、基本的に撮影したものは選ばずにすべて使い、自分の手で貼るというスタンスです。例えば今制作している《Tokyo》のために撮影した写真は、約２万4500枚ありますが、全部使うつもりです。写真は一枚一枚、どこで撮影したか覚えています。撮影したものを現像し、カットして、張り合わすという作業は、現地で歩いていた自分の経験を巻き戻す作業でもあります。この作業を誰かに任せて飛ばしてしまうと、そこで何があったかという記憶が欠けてしまう気がするので、作業はなるべく自分の手でやるようにしています。

―これだけの作業を一人で行っているのはすごいと思います。写真新世紀を受賞した時は、作品のプレゼンテーションのために大阪から恵比寿にある東京都写真美術館まで約500kmの距離を歩いたそうですね。

写真を撮りはじめるようになったきっかけが「お遍路巡り」だったので、歩くということは僕の原点となっています。僕は自分への自信のなさを、歩いたり、たくさんの写真を張り合わしたりすることで、覆い隠している気がしています。先ほど、撮影した写真をすべて使うと言いましたが、「選ばない」ということは「選べない」ともとれるわけです。写真にする風景を選ばずスキャンするように撮って、できた写真を選ばずに貼り合わしていくというのは、自分にとってメディテーションのような作業なのかもしれません。

―「Diorama Map」に対する一貫した姿勢は「アウトサイダーアート」に通じるところがあるかと思います。

自分では意外に思うのですが、海外でもそう言われることが多いですね。

―「Diorama Map」にはコンセプチュアルな要素を感じますが、ご自身を「写真家」と「アーティスト」ではどちらの立場だと考えていますか。

海外ではそこに加えて「製図家」か、と聞かれることもあります。自分にとって原点は写真です。でも、制作にはトライアスロンのように様々な行程があり、どれにでもなり得ると思います。

―東日本大震災前後に変化はありましたか。

震災が起こった時僕はブラジルにいたのですが、帰国後、仙台の被災地に足を運びました。仙台でも「Diorama Map」でしているように、高いところに登って撮影したのですが、被災地に残っている「高いところ」というと、津波から逃れるために被災者が登ってきた場所になるのです。そこから見た風景を、何年かした後にもう一度見返したいなとは漠然と思っています。震災に100%向き合えている自信はありませんが、撮影は淡々と続けていきたいと考えています。

―写真新世紀を受賞した後は、どのように過ごしていたのですか。

受賞直後は写真とは関係のないアルバイトを3つ掛け持ちしていました。バイト先のバーで、お客さんに声をかけられて関西の出版社の専属カメラマンとして就職し、その後上京して、フリーのカメラマンとして仕事をしていました。ある時、マイケル・ホッペン・ギャラリーのオーナーに声をかけられたのを機に、少しずつ作品を作ることに専念できるようになったのです。

―苦労してやっと今があるのですね。これから写真新世紀を応募しようとしている方に向けて、アドバイスをお願いします。

写真新世紀のように、あらゆる表現が受け入れられる間口が広い賞は、世界的にもなかなかありません。思い立ったら、まずは自分の力をぶつけてみて欲しいですね。やりたいことがはっきりせず頭の中が散らかっていたとしても、挑戦する過程で整理していけばいいのですから。

椹木野衣「新＝真世紀をめぐって」

1991年に年四回募集という驚くべきハイペースで始まったキヤノン写真新世紀。その後、94年からは年二回の募集、2002年からは年一回となり現在に至るが、応募者数は毎回1000人を優に超える規模に達している。受賞者のなかからは現在の写真界を牽引する力を持った存在が数多く送り出され、日本のみならず世界で活躍する者も稀でない。私見となるが、これを機会にその意義と歩みについて振り返っておくのも無駄ではないだろう。

まず最初に、写真新世紀が示したもっとも大きな意義は、写真公募展として展示型の形式をはっきりと打ち出した点にある。

従来の写真作品の公募形式は『アサヒカメラ』『日本カメラ』『カメラ毎日』などの写真雑誌が中心で、その発表の仕方はグラビア頁への印刷であった。他方、美術全般の公募展は専攻にこそ資料として写真を使うものの、最終的にはあくまでも展示芸術として扱われるから、その点で写真とは一線を画していた。むろん展示形式の写真展がなかったわけではないが、写真家にとって発表の晴れ舞台は、なんといっても何十万人もの人目にふれ印刷の粋を尽くしたカメラ雑誌のグラビアに、できるだけ大きく誌面を占めて載ることだった。写真が本質的に複製芸術ゆえのことだろう。

他方、フランスで写真が産声を上げて150年に当たる1989年あたりから、写真芸術をめぐる環境は世界的にも大きく変化しつつあった。簡単に言えば、写真をめぐる先の「印刷芸術＞展示芸術」という序列が次第に覆されるようになった。写真をいわゆる「写真」としてではなく、純粋に美術として扱おうという大きな力が働くようになったのである。この動向はすでに1970年代の初頭に美術の世界で記録性を重んじるアース・ワークの台頭や、1970年代後半に起きた写真を絵画と等価に扱う「ピクチュア派」の登場により時代に先駆けて見られたものだったが、この動きがいよいよ本格的となったのが1980年代の最末期だったのである。

複製が可能な写真がなぜ、一点ものでしかありえない絵画と等価でありうるのかについての細かい議論についてはここでは省く。が、写真＝絵画となることによって起きた大きな変化については端的に抜き出しておこう。まず、発表の形式としては展示が唯一の着地点となり、印刷はその展示の記録として図録に残される二次的なものとなる。第二に、絵画に准じて鑑賞されるため評価にも美術の文脈が入り込み、写真史以上に美術史との整合性が求められるようになる。第三に、美術館での収蔵部門は写真部門ではなく絵画部門となり、作家も画家に准ずるものとして扱われる。さらに、複製が二次的な意味しか持たなくなることで、おのずと個々の写真現物が持つ市場価値が高くなり、扱われるのも「アート・マーケット」へと変化することなどが挙げられよう。

こうした変化は最初、欧米での動きが先行した。欧米では絵画と写真は価値的にも市場的にもはっきりと分けられており、日本ではそのあたりがしごくあいまいであった。端的に言えば、欧米では写真よりも絵画のほうが価値的に重視されるし、市場での値段も比べ物にならぬほど高い。ところが、日本では現代絵画などは写真よりもはるかにマイナーな存在であり、値段もあってなきに等しく、一般社会的に認知度においても写真のそれとは比較にならない。

けれども、そのような国内外での違いにもかかわらず、冷戦の解体を前にして世界がグローバル化の徴候を示すようになると、日本の美術館でも写真を「写真」としてではなく一種の絵画やインスタレーションとして捉える試みが公的な美術館でも頻繁に開かれるようになった。栃木県立美術館で開催された「現代美術になった写真」展（1987～88年）や水戸芸術館現代美術ギャラリーで開かれた「脱走する写真」展（1990年）などは、その代表的なものと言えるだろう。

キヤノン写真新世紀の登場は、このような気運を巧みに汲み取り、それに見合う器を提供する絶好の機会として登場した。実際、写真新世紀は扉を開くとたちまち、のちに写真界というよりはアートの世界で活躍する多くの作家を輩出した。1992年度に優秀賞を受賞したオノデラユキ、同じく今義典、野村浩。1996年度に優秀賞を受賞した野口里佳、2000年度に優秀賞を受賞した澤田知子はこうした才能であった。さらに1994年度に優秀賞を受賞した大森克己（現審査員）、翌1995年度に最年少でグランプリを射止めたヒロミックスや優秀賞の佐内正史（両名とも大森と同じく現・審査員）、そして1996年度優秀賞の蜷川実花といった面々のなかには、写真界の新人賞登竜門である木村伊兵衛賞を受賞する一方で、実際の活躍の領域がアート界や映画の領域にまで及んでいる者も多い。その意味では、従来通りの「写真家」とは呼ぶことができないくらいだ。入賞こそ逃したものの、後にキュレーターとして活躍する東谷隆司が第三回展で佳作入選しているのも興味深い。

ただし、写真新世紀がこのような新しい時代に見合った才能を発掘しえたのは、制度的な枠組み設定の妙だけではない。いくら器がしっかりしていても、そこに中身を収める審査員の目次第で、結果はいかようにもなってしまう。

この点、写真新世紀の審査員構成はひじょうにバランスが取れ、同時に冒険的な選考姿勢を打ち出すものでもあった。当初から審査に加わった三名はそれぞれ写真家（荒木経惟）、写真評論家（飯沢耕太郎）、アート・キュレーター（南條史雄）というもので、写真の公募展ではほかに例を見ないものであった。

飯沢はある意味、かねてからの写真評論を継ぐ存在だが、同時期に写真雑誌『デジャ＝ヴュ』を創刊してみずから編集長となり、従来のカメラ雑誌に収まらない作家たちを精力的に紹介していた。南條のように写真を専修したわけではない現代美術の展示に関する専門家が、写真のコンペティションに参加するのも異例なことだったろう。さらに荒木の存在はひときわ大きな意味を持つ。

荒木は従来のドメスティックな写真の文脈では強いて言えば「カメラマン」にあたる存在で、高尚な芸術表現寄りの「フォトグラファー」からも異質な距離を保つ異才的な存在であった。しかしその「写真」からの微妙な距離感において反対に海外では写真家（フォトグラファー）でさえなく、より強く美術家（アーティスト）として認知されるようになり始めていた。現在では欧米の美術界での荒木への評価には揺るがぬものがあり、その主要な発表の場は美術館での個展や大規模なインスタレーションであるが、このような価値の転倒は国内での「アラーキー像」とは著しい乖離を示していた。けれども、ひとりの写真家をめぐる国内外でのこの大きすぎるギャップこそ、当時の写真界で起きていた変化がもっとも端的に可視化された例であったといってよい。

写真新世紀は荒木のほかにも2002年度から同様に海外ではアーティスト、国内では写真家というギャップを保ったまま今日に至る森山大道を審査員に加え、その時々に応じてホンマタカシ（1998年度）、横尾忠則（2000年度）、都築響一（2001年度）、鈴木理策（2003年度）、やなぎみわ（2004年度）、日比野克彦（2006年度）といったいずれも境界領域で活動する展示芸術家たちをゲスト審査員に加えて来た。ロバート・フランク（1994年度）のような王道はもちろん、ベルナール・フォコン（1998年度）のような孤高の存在、そしてウィリアム・エグルストン（2005年）といった美術界にも大きな影響を及ぼす写真家をゲストに招いたのも大きかったと言えるだろう。写真の領域さえ逸脱するこうした複数の異質な目がなければ、写真新世紀といえど、ここまで短期間でかくも先鋭的な新人を多く輩出することはできなかっただろう。

こうして写真新世紀は、「新世紀」を向かえるにあたってくぐる必要があった「世紀末」での写真の変革にみごとに順応し、同時にそこに進んで人材を送り込む先進的な公募展としての役割をいち早く果したと言えるだろう。この意味でまさしく、写真新世紀は写真の新世紀の黎明を体現していたといってよい。

けれども、ときすでに20世紀ではない。写真新世紀がそれでもなお「新」を謳うならば、その形容は21世紀から22世紀にまで及ぶほどの予見性を求められる———そう言っても大袈裟ではあるまい。それくらい、かつて新世紀を目前に写真の世紀末と併走した写真新世紀にとっても、もはやまったく未知の領域が、21世紀に入ると次々にその扉を開いていったのである。

その筆頭に挙げられるのは、なんといってもアナログ・カメラからデジタル・カメラへの全面的な移行だろう。フィルムのデータ化は写真が情報化されたことを意味し、その点で今日の写真はすでに古典的な意味では写真ではない。それと歩を合わせるようにインターネットの普及と端末のモバイル化は、すでに通信機器と写真機器との境界をかぎりなくあいまいなものにしている。それだけではない。今日ではひとつの機器のなかで動画と静止画を両立させる機能も普通になりつつある。

このような写真の情報化＝不可視化（データ化された情報そのものは見えない）は、前世紀末に訪れた写真の展示芸術化と比べても、さらに大きな変革を写真と写真家に迫るものといえるだろう。写真の展示芸術化は、写真の高級芸術化と、それに対応する別の市場へと写真を誘った。それも大きな変化であったには違いない。けれども今日、われわれが迎えている写真の情報化＝不可視化は、そもそも写真の持つ価値を桁上げするに留まらず、写真自体を滅ぼしてしまう危険性＝可能性さえ孕んでいる。

けれども、そこにこそ本当の意味での写真の新世紀があることは、あらためて言うまでもない。そして、この境界線の領域に立ち向かうには———逆説的な言い方になるが———ますます生身の写真家そのものが試されることになるだろう。なんとなれば、過酷な情報芸術の環境に耐えるのは、なんといっても個々の写真家の肉体であることに変わりはないからだ。

その点で、作品はもちろんのことだが、写真新世紀が当初より取り入れている最終審査での作家自らの発表形式というのは、今までにも増して重要なものとなっていくにちがいない。最終審査でわれわれ審査員が観ているのは、意見の内容や話し方の上手下手だけではない。その人の態度、顔つき、キャラクター、ファッション、写真家としての潜在的な耐久性など、そこに含まれる要素には限りがない。ますます苛烈化する世界のなかで写真家が、おのれの目と身体と手にする機械だけをたよりに未来を切り開いて行かなければならないとしたら、作品と人格を切り離さずに観るのは当然のことだろう。来期に向けさらに鮮烈かつ爆発的な才能に壇上で巡り会うことを期して筆を置く。

椹木 野衣（さわらぎ のい）美術批評家。1991年に刊行した最初の評論集『シミュレーショニズム』が、90年代の文化動向を導くものとして広く論議を呼ぶ。また主著『日本・現代・美術』では日本の戦後を「悪い場所」と呼び、わが国の美術史・美術批評を根本から問い直してみせた。他に大阪万博の批評的再発掘を手がけた『戦争と万博』など著書多数。近年は岡本太郎の再評価や戦争記録画の再考にも力を注いでいる。現在、多摩美術大学美術学部教授、芸術人類学研究所所員。

写真新世紀

2014年度 第37回公募開催 作品大募集！

「写真新世紀」は、写真表現の可能性に挑戦する新人写真家の発掘・育成・支援を目的として1991年にスタートしたキヤノンの文化支援プロジェクトです。公募形式のコンテストに加えて、受賞作品展の開催、受賞作品集の制作、ウェブサイトでの情報発信などを総合的に行っています。コンテストでは、銀塩・デジタル写真を問わず、自由で独創的な写真表現を応援しており、作品のサイズや形式、点数、応募者の年齢、国籍などに制限はありません。

審査員 ＊敬称略（50音順）

大森克己（写真家）／ 佐内正史（写真家）／ 椹木野衣（美術批評家）／ 清水穣（写真評論家）／ ヒロミックス（写真家）

公募受付期間　4月8日（火）～5月27日（火）

WEB応募申し込みの詳細はこちらにアクセス **canon.jp/scsa**

写真新世紀 巡回展2014／大阪・仙台で開催！

「写真新世紀」の2013年度（第36回公募）受賞作品展を、大阪、仙台で開催します。2013年度のグランプリに選ばれた鈴木育郎、優秀賞の安藤すみれ、海老原祥子、水野真、藪口雄也、そして2012年度グランプリ受賞者である原田要介の新作を展示します。各会場では、会期中アーティスト・トークを開催し出展作品の制作意図やコンセプト、今後の活動予定などについてご紹介いただきます。また、質疑応答など来場者との交流の場を設ける予定です。

写真新世紀 大阪展2014

2014年4月8日（火）～5月1日（木）　10：00～19：00　会期中無休、入場無料

アートコートギャラリー　〒530-0042 大阪府大阪市北区天満橋1-8-5 OAPアートコート1F　Tel. 06-6354-5444

JR環状線 桜ノ宮駅下車 徒歩8分／JR東西線 大阪天満宮駅下車 徒歩10分／地下鉄 南森町駅下車 徒歩10分

アーティスト・トーク 2014年4月19日（土）15:00 ～ 16:30 出展者6名（原田要介、鈴木育郎、安藤すみれ、海老原祥子、水野 真、藪口雄也）によるスライド＆トーク

写真新世紀 仙台展2014

2014年5月23日（金）～6月4日（水）　10：00～19：00　5月28日（水）休館、最終日17：00まで、入場無料

せんだいメディアテーク6F ギャラリー6a　〒980-0821 宮城県仙台市青葉区春日町2-1　Tel. 022-713-3171

仙台駅から泉中央行きで約3分、勾当台公園駅下車。「公園2」出口から徒歩6分

アーティスト・トーク 2014年5月23日（金）18：30～20：00 「写真のこと―活動20年を振り返る」大森克己×能谷聖司

アーティスト・トーク 2014年5月24日（土）15:00 ～ 17:00 出展者7名（菱田雄介、原田要介、鈴木育郎、安藤すみれ、海老原祥子、水野 真、藪口雄也）によるスライド＆トーク

写真新世紀

写真新世紀誌28号
2014年4月1日発行

発行責任者：キヤノン株式会社
渉外本部 ＣＳＲ推進部 写真新世紀事務局
〒146-8501 東京都大田区下丸子3-30-2
Tel. 03-5482-3904　Fax. 03-5482-5131
Cover photo：鈴木育郎「鳶・CONSTREQUIEM」より

本誌掲載の写真・記事の無断複製・転載を禁じます。
©2014 Canon Inc.　All rights reserved　非売品

PUB.NCP04 0414 GC10 Printed in Japan

VEGETABLE OIL INK

Canon